都市変説　～笑う笑わないはあなた次第～

Cherry On.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
都市変説　～笑う笑わないはあなた次第～

【Ｎコード】
Ｎ１２３６Ｉ

【作者名】
Ｃｈｅｒｒｙ　Ｏｎ．

【あらすじ】
怖い話の一種である「都市伝説」を面白おかしく書き換えてしまおう、という発想の元、様々な都市伝説をくだらなさ全開で書き換えた一話完結の連載小説。
…この話が面白いか面白くないかは…　…　あなた次第です　…

第一説　メリーさん

ねぇねぇ…　「メリーさん」って話…　知ってる？

電話がかかってくる度に、だんだん自分のいる場所に近づいてきて…

最後に…　自分の背後まで来て…　その時に後ろを振り向いちゃうと…

殺されちゃうんだって…

怖いよね…

●第一説　メリーさん

プルルル…　プルルル…

ピッ

「はい、山田（仮名）です」

『もしもし、私メリーさん』

「（え！？これって…）」

『今からあなたの家に行くの』

「…！」

『今駅前にいるんだけど、ここからどうやって行けばいいのか教えてほしいの』

「駅前！？駅前にいんの！？待ち合わせ感覚！？　つーか教えるワケねーだろ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

「何なんだよ…」

プルルル…　プルルル…

ピッ

「…はい」

『私メリーさん。今あなたの家に向かってるの』

「な…！」

『でもやっぱり道が分からなくなっちゃったの』

「なんでだよ！　だったらせめて事前に調べとけよ！」

『昼間と夜ではだいぶ景色が違うの』

「やってたのかよ！意外と用心深いんだな！　っつーか昼間にウロウロすんじゃねーよ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「…何」

『私メリーさん。今あなたの家の近くにいるの』

「（…道分かったのか？）」

『目印のコンビニまで来たのに家が見つからないの』
「明るいところに堂々と行くんじゃねーよ！　でも事前に下見した甲斐はあったんだな！」
『この近くのはずなの』
「…もしかして、あんたが今いるのって、セ〇ン？」
『そうなの』
「…家の近くにあるコンビニはロー〇ンなんだけど…」
『そうなの？』
「うん」
『……』
「……」
『まぎらわしいことは、やめてほしいの』
「俺に言うんじゃねーよ！アッチの経営者に言えよ！」
『そうするの。じゃあ今から行ってきまーす。　…てオイオ～イ！』
「まさかのノリツッコミ！？何がしてーんだお前は！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「何」

『私メリーさん。あなたの言った通りだったの』

「あ、そ」

『やっぱり頼りになるの』

「やっぱりって何だ！お前俺のなんなんだよ！」

『ごめんね、着くまでもうちょっとかかりそうなの』

「気にすんな。　…いやいやおかしいだろ俺！来んじゃねーっつーの！」

『もうちょっとだけ待っててくれるかなー？』

「いいともー！　言ってる場合か！こういうベタなネタはやめれ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「…今度は何」

『私メリーさん。ちょっと聞きたいことがあるの』

「何だよ」

『自分を”さん”付けで呼ぶのって実際どうなの？』

「どーでもいいよ！つーか今聞くことかソレ！？」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「何だ、いい加減にしろよ！」

『もしもし、俺だけど。何、どうしたの？』

「あ、鈴木（仮名）！？　いやスマン何でもない」

『そうか？　大丈夫かよオイ』

「大丈夫大丈夫…　悪い、今ちょっとたてこんでんだ。後で俺からかけ直すわ」

『そか。じゃあまた後でな』

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「…うん？」

『…話し中とか、やめてほしいの』

「お前かよ！いいだろ別に！俺にだって都合があんだよ！」

『空気を読んでほしいの』

「オメーにだけは言われたくねーよ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「あ！？」

『私メリーさん。今月電話代ピンチなの』

「知らねーよ！じゃあやめちまえもう！　つーか電話代払ってんのかよ！」

『払ってるの。携帯で通話しながら移動してるの』

「携帯持ってんのか」

『うん。ＩＤＯの最新型携帯なの』

「ＩＤＯとかもう存在すらしてねーよ！」

『移動しながら話すだけに』

「全然うまくねーんだよ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「…ぁい」

『私メリーさん。もうすぐあなたの家に着くにょ』

「口癖変えんなよ！読者に分かりづらいだろうが！」

『第一話ということでまだキャラが定まってないにょ』

「余計なこと言うな！　ていうかお前今後出演予定無いから、キャラとか気にしなくていいんだよ！」

『そうなにょ？』

「そうなの！」

ガチャリ　ツーツーツー…

「切れた！」

プルルル…　プルルル…

ピッ

「何だよもう！」

『私キャシーさん』

「いきなり改名すんな！読者に分かりづらいことはやめろっての！」

『アンケートの結果が悪くなって打ち切りになっちゃうから？』

「それはバク〇ンだろ！よく知ってんな！お前ホントに妖怪か！？」

『…会ったこともない相手を妖怪呼ばわりは、いくらなんでも失礼だと思うの』

「急にまともなこと言うなよ！なんか俺すげー嫌なヤツみてーじゃん！」

『大丈夫。私はあなたが本当は優しい人だって知ってるの』

「その恋人目線やめろっての！　つーかここのくだり大丈夫か！？著作権的な問題とか大丈夫か！？」

『大丈夫じゃないの？』

「不安！作者すっごい不安！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「何だよ！」

『私メリーさん。今あなたの家の前にいるの』

「げ、着いたのか」

『玄関の鍵を開けてほしいの』

「そこはうまいことすり抜けてこいよ！」

『それと、お帰りのキスをしてほしいの』

「新婚夫婦か！第一お帰り言うのおかしいだろ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「何だ、まだいたのか」

『私ご存知メリーさん』

「ご存知とかいらねーから」

『今あなたの家の階段を登ってるの』

「結局玄関すり抜けてんじゃねーか…」

『だって私妖怪だもの』

「自分で言った！お前さっき妖怪呼ばわりは失礼とか言ってたよね！？」

『そんな昔のことは忘れたの』

「つい数分前だよ！」

『あなたに会うまでの時間はすごく長く感じるの』

「やめろっての！これ恋愛小説じゃねーんだから！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「…あい」

『Ｙｅｓ！私メリーさん！』

「どこぞのクリニックか！」

『今あなたの部屋の前にいるの』

「来んなよ！帰れよもう！」

『今のうちにエロ本とかを片付けてほしいの』

「つまんねーこと気にしてんじゃねーよ！つーかまず出しっぱなしにしてないしね！？」

『…やらしいの』

「やかましいわ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

プルルル…　プルルル…

ピッ

「…あん？」

『私メリーさん。

今、あなたの後ろにいるの…。

ねえ、私キレイ？』

「話変わってんじゃねーか！　もういいよ！」

第一説　メリーさん（後書き）

とあるお笑いコンビのコントを見て思いついた話です。
自分でも書いてて楽しく、非常に書きやすかったですね。
第一話ということでちょっとだけ気合い入れて書きました。皆様からのご感想をお待ちしております。

第二説　口裂け女

ねぇねぇ…　「口裂け女」って話…　知ってる？

その女はね…　耳まである大きなマスクと…　真っ赤なロングコートを身に着けていて…

『私キレイ』って聞いてくるの…

その時に正しい答え方をしないと…　手に持っている鎌で…

首を斬られて殺されちゃうんだって…

怖いよね…

●第二説　口裂け女

コッ…　コッ…　コッ…

『ねえ…　そこのあなた…』

「はい？」

『ねえ…　私、キレイ？』

「あ、質問はマネージャーを通してお願いしますぅ」

『何でよ！　どこの芸能人よアンタは！』

『違うでしょう。私キレイときたら分かるでしょう』

「あ…　もしかして…」

『そうそう、ソレよソレ』

「近所の山田さんの幼馴染のはとこの親友の彼氏の愛人、ジャスミンさんですか！？」

『何がなんだか分かんないわよ！　ていうかアタシどっからどう見

ても日本人のハズなんだけど！？』

「ジャスミンさん、日本語ずいぶんうまくなりましたねぇ」

『だから違うっての！』

『ちょっとアンタ！まさかこのアタシを知らないわけ！？』

「ん～…　ちょっと待ってくださいね～…」

『何なのよもう…　こんなの初めてだわ…』

「どっかで会ったことはあると思うんですけど…」

『それは無いわよ！アタシに会った奴は9割方殺されるんだから！』

『ちょっと…　いい加減にしなさいよアンタ。殺すわよ？』

「まあまあ、冗談ですって。口裂け女さんでしょ？」

『知ってるんじゃないの。分かってんなら最初から言いなさいよ。こういうのはリズムが大事なんだから』

「そりゃ知ってますよ～。有名じゃないですか」

『あら…　そうなの？』

「そうですよ〜。みんな知ってますよ」

『…そ、そう。それは光栄だわ』

「ただちょっと顔が出てこないんですよね」

『目の前にいるでしょうが！すでにご本人登場済みでしょうが！』

「…　あ！　あなたがあの！」

『さっきからそう言ってるでしょ！』

『…まあ、いいわ。もっぺん最初からやり直すわよ。　ねえ、私キレイ？』

「…　え〜っと…　（ヒソヒソ…　これどうやって答えればいいんでしたっけ…）」

『…　（ヒソヒソ…　キレイって答えるのよ…　っていうか船場〇兆じゃないんだから！）』

「そうだそうだ。　ええ、キレイですよ」

『…これでも…』

「ただ、目と鼻はあんまりキレイじゃないかなぁ」

『じゃあそれブサイクじゃないの！　口元隠して目と鼻ブサイクじゃ純度百パーでブサイクじゃないの！』

「そんな卑屈になってはいけませんっ！」

『怒ったときの杉下〇京みたいな言い方しない！　っていうかアンタのせいでしょうが！』

『余計なことを言うんじゃないの！　このままマスクを外してギャーっていく流れでしょ！』

「えー、外すんですかぁ？」

『当たり前でしょ。外さないと話が続かないんだから』

「外せないっていう体でいけませんかね？」

『いけるわけないでしょ！どうしてそうなるのよ！』

「口裂け女のマスクは呪われている！」

『呪われてないわよ！ドラ〇エか！』

「ドゥルンドゥンドゥンドゥンドゥンドゥンドゥンドゥンドゥンドゥールルン♪」

『あの嫌な音楽出さなくていいの！』

「詳しいですね」

『ドラ〇エは私達の世界でも有名なのよ！　…って変なことを言わせないでちょうだい！世界観世界観！』

「でも口裂け女さんってホント有名ですよね。どうしてなんですか？」

『そんなのアタシが知ってるわけないでしょ』

「自分としてはどう思います？」

『マイクフォローやめなさい。　…そうね、やっぱり鎌で殺されるってところが怖いからじゃないの』

「え！　そんな怖いんですか！？」

『アンタ今頃気づいたの！？　ってかさっきアンタあたしのこと知ってるって言ったじゃん！』

「てっきり木更津のほうの口裂け女さんかと思ってて…」

『木更津にバージョン違いなんて無いわよ！勝手に話を作り替えないで！　っていうかその木更津バージョン知っててなんで本家のアタシを知らないの！？』

「知らないんですか？木更津では今口裂け女さんがアツいんですよ」

『何よそれ！勝手にニセモノ流行らせないでよ！』

「アムラー、シノラーに続く、口裂けオンナーが急増中なんです」

『ダサッ！オンナーって何さ！？　つーか木更津の人に怒られないかしらコレ！？』

『いやいやそうじゃなくて…　そもそもアタシにはバージョン違いなんかないのよ。アタシはアタシ一人だけなの』

「でも、中にはバージョン違いがある人もいるじゃないですか」

『…そんなのいたかしら』

「ほら、トイレの花子さんの男子便所バージョンとか」

『ああ…　なるほどね』

「口裂け女さんはそういうの無いんですか？」

『さあ、無いんじゃない』

「口裂け女、玉無し男、みたいな」

『単なるオカマじゃない！』

「鎌使って殺すだけに」

『全然うまくないわよ！　こんなネタ前回もやったわね！作者もうちょっとボケのバリエーション増やしなさいよ！』

「あ、でもサオも切らないとオカマになりませんね」

『コラー！　安易に下ネタに走るのやめなさい！』

『だ・か・ら！アタシにはそんな男バージョンみたいなのはないんだってば！』

「じゃあ作りましょう！この際だから」

『どの際よ！大体作ったところで誰がやんのよ！』

「口裂け女、鼻デカ男、とか」

『人の話聞きなさい！てゆーかそれもただ鼻がデカいだけの男じゃない！』

「小〇くーん、やってみないー？」

『実在する人物の名前！いくら伏字にしているとはいえ！』

「作者がビビったようですね。原案では実名丸出しだったのに」

『裏事情ぶっちゃけちゃダメ！作者も色々気ぃつかってんだから！』

『ちょっとホント終わらないから。いい加減先に進まない？』

「どうするんでしたっけ？」

『だから、アタシがマスクを外してアンタが驚けばいいのよ』

「えー、この空気で驚くんですかぁ？」

『誰のせいでこんな空気になったと思ってんのよ！いいから驚きなさい！分かったわね！』

「は～いはいはい、分かりましたよ」

『なんで面倒くさそうなのよ！　ほら、これでもキレイ！？』

「あ、すいませんちょっと電話が」

『後にしなさいよ！ちょっとコッチ見なさいよ！　あぁ～もう！』

「はい…　はい？　間違いじゃないですか？」

『…さっさとしなさいよ…』

「あ～、すいませんよく分からないんで切りますね～」

『…まったく、誰よこんな時に』

「たぶん間違い電話だと思うんですけど、メリーっていう人からで…」

『どんだけ出たがりなのよアイツ！　もういいよ！』

第二説　口裂け女（後書き）

はい、第二説「口裂け女」編です。

この話は、バージョン違いのくだりのところをまず始めに思いついて、そこから発展させて現在のような形になりました。その結果、口裂け女さんがツッコミをやるハメになってしまいました。口裂け女さん、ごめんなさい（笑）

しかし…　ホントに大丈夫ですかねこの話。小〇君に訴えられないことを祈ります（笑）

第三説　コックリさん（前書き）

この話に登場する「コックリさん」は、やり方は簡単ですが非常に危険な降霊術です。好奇心や遊び半分でやってみようなどとは決して思わないで下さい。

実行したことでいかなる損害が発生しても、作者は一切責任は取れません。自己責任でお願いします。

なお、作中に登場する人物は全て架空です。

第三説　コックリさん

ねぇねぇ…　「コックリさん」って話…　知ってる？

コックリさんはね…　決められた儀式をして呼び出すんだけど…

呼び出すことができれば…　どんな質問にも答えてくれるんだって…

でもね…　途中で止めようとしたり…　帰ってもらうのに失敗すると…

コックリさんに体を乗っ取られちゃうんだって…

怖いよね…

●第三説　コックリさん

「…　うん。誰もいないわね」

『…ねえ、ユウちゃん…。やっぱりやめようよ、コックリさんなんて』

「もう！いまさら何言ってんのよ、アイ」

『だってほら、こういうのって遊び半分でやると危ないって言うし…』

「大丈夫だって！何かあってもあたしがアイのこと守ってあげるからさ！」

『…　うん、分かった…』

「うん。　じゃあさっそく始めましょ」

「コックリさん、コックリさん、おいでください」

『コックリさん…コックリさん…おいでください…』

「…　特に何も変わらないわね…」

『…　そう、だね…』

「…何か質問してみようか。　えーっと…　コックリさんコックリさん、今ここにいらっしゃいますかぁ？」

…　はい　…

「…！」

『ちょ、ちょっとやめてよユウちゃん！』

「あ、あたし何もしてないよ！」

『ちょっと…　ヤダぁ…！』

「お、落ち着いて。ね？　ほら、せっかくだから色々聞いてみようよ」

『…　う、うん…』

「そうだなぁ…　コックリさんコックリさん、え～っと…　好きな食べ物は何ですか？」

『…ユウちゃん？』

「最初は軽く…ね？これなら怖くないっしょ？」

…ビールとえだまめ…

「……何コレ」

『…お、オジサン…なのかな…？』

…そうだょ…

「オッサンだったの！？なんかイメージと違う！」

『しかも語尾に小っちゃい”ょ”を入れてきてるよ！』

「若い娘相手にがんばってメールするオヤジだわ！確かにオヤジだわコレは！」

…そこまでオヤジっていわれちゃうと、オジサンちょっとだけかなしいなぁ…

「自分のことオジサンって呼んでるし！完全にオッサンよコックリさん！」

「…ち、違う質問してみようか。ね？」

『う、うん…。　早くも緊張感がなくなってる気もするけど…』

「気にしないの！　えーっと…　コックリさんコックリさん、私の母親の名前は何ですか？」

…　け　い　こ　…

「…当たってるわね…」

『……』

…　オ　ジ　サ　ン　の　は　つ　こ　い　の　あ　い　て　と　お　な　じ　な　ま　え　…

『初恋なんてあったの！？』

「てゆーか聞いてないし！勝手にしゃべんないでよ！」

…わすれもしない、あれはオジサンがちゅうがくにねんのころ…

『ユウちゃん！勝手に過去編いこうとしてるよ！』

「聞いてないっての！つーかなんでアンタが中学通ってんのよ！」

…からだばかりおとなで、なかみはまだまだこどもだったオジサンは、とうじほけんしつのせんせいをしていたけいこせんせいのことがすきだった…

『ユウちゃん…　ちょっと話長そうだよ…』

「どんだけオヤジキャラ全面に押し出すのよ…」

…はくいすがたのけいこせんせいのことをおもいだしては、よなよなひとりプレイを…

『イヤァァー！これセクハラだよユウちゃん！』

「女子高生相手に低俗な下ネタを披露すんじゃないわよ！やめやめー！」

『ハア…　ハア…』

「…まったく…　これホントに本物なんでしょうね…？」

…ほんものだって。オジサンをしんじてほしいなあ…

「誰のせいで信じられなくなってると思ってんのよ！真面目にやって！」

『お、落ち着いてユウちゃん』

「あ、ご、ごめんね」

『そういえば私聞いたことあるんだけど…　コックリさんって、やってる人が質問に対して無意識に指を動かしちゃってる…　っていう説もあるんだって』

「へぇ、そうなんだ。　…ていうかそれはそれで問題な気もするけどこの場合」

『だから、その場の誰も答えを知らない質問をすると、答えられないんだって』

「なるほどね。…つまりあたしもアイも答えを知らない質問をして、それでも答えが返ってきたら」

…ほんものということだね？…

「最後持ってかれた！勝手にしゃべんなっての！」

『じゃあ質問してみるね。　…コックリさんコックリさん…　…四月の誕生石は…何ですか？』

「…　あたし、知らない。アイも？」

『うん』

…ダイヤモンド…

「…　当たってる、のかな？」

『分からない…。　けど、すぐに答えが返ってきたよね』

…けいこせんせいがひだりてのくすりゆびにいつもしていたゆびわとおなじ…

「けいこ先生まさかの再登場！？」

『しかもユウちゃん！けいこ先生人妻だったよ！』

…ひとづまであるけいこせんせいを、ほけんしつのベッドのうえでむりやりおそうところをそうぞうしては、よなよな…

『いや〜ん！また始まっちゃった！』

「AVの見すぎなのよアンタは！しかもSっ気が強いし！」

…まあ、ぎゃくにせんせいのほうからおそってくるっていうのもなかなかに…

「違った！どっちもイケるタイプだった！」

『ユウちゃん！止めて止めて！』

「そうだった！こんなことツッコんでる場合じゃなかった！」

「し、質問が悪かったわね。違うこと質問しましょ」

『う、うん、そうだね』

「そうねぇ…　コックリさんコックリさん、あなたはどこから来たんですか？」

…おしえてほしい？…

「そういうのいらないから！さっさと答えなさいよ！」

…しながわく…

『意外と近場！』

「一般人か！大体そんなトコからどうやって来たのよ！？」

…やまの○せん…

『電車通勤なの！？』

「アイ、そうじゃない！通勤とかそういうシステムがそもそもおかしいから！」

…ちゃんとりょうてをあげてのってきたからだいじょうぶだょ…

「痴漢に間違われないように気を使わなくていいのよ！」

『そもそも普通の人には見えないんじゃないの！？』

…な～んちゃってかっこわらい…

『うわぁ、ウザい！』

「（笑）とかふざけすぎ！結局何も答えてないし！」

『…　本物…　なのかなぁ？』

「…どうかしらね…。　っていうかもうすでにおなか一杯なんだけど…。　まだ続くのかしらこの話」

…　つ　づ　く　ょ　…

『…続くって』

「…なんでコイツが知ってんのかしら」

…　さ　く　し　ゃ　い　わ　く　、　こ　の　あ　と　の　く　だ　り　が　こ　の　は　な　し　の　イ　チ　お　し　ら　し　い　ょ　…

「詳しすぎるでしょ！何者なのコイツ！？」

『…しかもユウちゃん、若干ハードル上がっちゃったよ』

「ホントよ！そんなに期待するなと一応フォローしておくわ！」

「…気を取り直して…　じゃあアイ、いよいよアレ、聞きましょ」

『…うん…』

「うん。　…コックリさんコックリさん、アイのことを好きな男子

の名前を教えてください」

『……』

…じょうのうちみつひこ…

『…！』

「城之内君だって！アイ、やったじゃん！」

『う、うん』

「やけるね～コノ～」

…おじさんもキミみたいなこはわりとタイプだなぁ…

『エェ！』

「聞いてないし！ていうかアンタ男”子”じゃないでしょ！」

…どことなくわかいころのけいこせんせいににてるし…

『三度目！』

「けいこ先生ネタもういいっての！　っていうかこの小説、全体的にてんどん多くない！？」

…せいふくをきたままのキミを…

『イヤァァ怖い！違う意味で怖い！』

「そーはさせない！これ以上の下ネタはこの作品の存続に関わるわ！　コックリさんコックリさん、あたしのこと好きな男子はいる！？」

…ちっ…

「舌打ちされた！ホント何なのコイツ！？」

…きみみたいなタイプはオジサンあんまりすきじゃないな…

「アンタの好みはどーでもいいのよ！でも何でかしらちょっと悔しい！　…ってそうじゃなくて！さっさと答えなさいってば！」

……

「アレ！？シカト決め込んでんだけど！こんなのアリなの！？」

『コックリさん、早く教えてあげて！』

…はいは～い、ちょっとまってね～…

「一転して即レス!?もしやあたし嫌われてる!?」

…しゃべるなメスブタ…

「嫌われてるの確定した!何なのよもうムカツク〜!!」

『ユウちゃん落ち着いて! コックリさん、まだ!?』

…もうちょっとまってね、いまググってるとこだから…

『文明の利器を活用してる!?』

「世界観台無しじゃない!だいぶ前から崩壊してるとはいえ!第一ググって出るもんじゃないでしょ!?」

…さんけんヒット…

『三件!?』

…あ、でもこのさんけんのファンサイト、かんりにんみんなおなじだ…

『さてはストーカー的な誰かに狙われてるよユウちゃん!』

「もはやコッチのほうが怖いんだけど!」

…しんれいげんしょうよりも、げんじつのにんげんのほうがすうば

いこわいというきょうくんだね…

『うまいこと締めようとしてる！』

「そんなんで締められるわけないでしょ！何の解決にもなってないし！ファンサイトとかマジありえない！」

…こんなのにもファンとかいるんだなかっこわらい…

「よし分かった！お前一発殴らせろ！」

『だめユウちゃん！無理だから！無理だから！』

「ハア…　ハア…」

『お、終わりにしようかユウちゃん』

「…そ、そうね…。　…何でこんなに疲れてんのかしら…」

…さくしゃはもっとつかれてるよ…

「アンタ作者のなんなのよ！？もういいから勝手にしゃべんないで！」

『ゆ、ユウちゃん…』

「あ、ああ、そうね。それじゃあ…」

「コックリさん、コックリさん、お帰りください」

『コックリさん、コックリさん、お帰りください』

…うん、またよんでね。バイバ～イ…

「帰ってないし！」

…きっぷかわなくちゃ…

『帰りも山○線だ！』

…すっかりおそくなっちゃった。

こりゃよめにおこられるなぁ…

『結婚してたんだ!?』

「恐妻家なんて情報今更いらないわよ!さっさと帰んなさい!」

…ただいま、けいこ。おそくなってゴメンね…

「けいこ先生が嫁!?ってことはけいこ先生バツイチ!?」

『離婚を乗り越えて中学以来の恋を実らせたんだ!わぁステキ!』

「とか言ってる場合か!
もういいよ!」

『もういいよ!』

第三説　コックリさん（後書き）

はい、第三説「コックリさん」編です。

この話はまず「コックリさんがググる」というネタをまず始めに思いつきました。　…ですが、その後けいこ先生を思いついて、その話を膨らませていく内に、いつの間にかほとんどけいこ先生メインの話になっていました。世の中何があるか分かりませんね～。

あと、今回はやたら下ネタが多くなってしまいました。ホントすいません（笑）

ちなみに、四月の誕生石は本当にダイヤモンドです。コックリオジサン、どうやら本物だったようですね（笑）

※念のため作中用語解説

てんどん：同じネタやセリフを繰り返し使うこと。作者の得意技。

第四説　追いかけババア

ねぇねぇ…　「追いかけババア」って話…　知ってる？

○○県にある…　国道○○号線って道路はね…

民家も街灯も無いから…　夜中は真っ暗になるの…

夜中にその道路を車で走ると…　後ろから「追いかけババア」が追いかけてきて…

もし追いつかれちゃうと…

必ず事故に遭って死んじゃうんだって…

怖いよね…

●第四説　追いかけババア

女「今日はありがと～。すっごい楽しかった」

男「ははは、それはよかった」

女「ねぇ、この後はどうするぅ？」

男「え？　…いや…それは…　え～っと…」

女「ちょっと！何いやらしいこと考えてんのよ、このスケベ！」

男「エェ！？　…ははは、厳しいなぁ」

女「…　ねえ…ちょっと…　この道ヤバいよ…」

男「？　…どうして？」

女「…知らないの？　ここね…　夜中に車で走ると『追いかけババア』が…出るんだって」

男「追いかけババアって…　車より速く走るっていう都市伝説の？」

女「うん…」

男「…ははは、まさかぁ」

女「でもすごいウワサになってるんだよ。私の知り合いも見たって…」

男「…大丈夫！たとえ出ても俺の愛車でブッちぎるから！」

女「愛車？このポンコツ軽自動車のこと？」

男「エェ！？」

女「こんな車でブッちぎるとか正気で言ってる？」

男「…厳しいなぁ」

女「……　！！！！　あ、あ、あ…！！」

男「…？　どうしたの？」

女「…バ…　バックミラーに…！！」

男「え…？　！！！！　…ま、まさか…！　ウソだろ…！？」

ダッ…　ダッ…　ダッ…　ダッ…

ダッダッダッダッダッダ…！！

ダダダダダダダダダダダダ！！！！

女「キャアアアアアアアア！！！！！」

男「お……　追いかけババアだ！！」

婆『そうです！　ワダスが、追いかけババアです！』

女「イヤアアアアア！！

志〇け〇のモノマネしてるぅ！」

男「悲鳴上げるトコそこかよ！確かに俺も思ったけど今はいいだろ！」

女「つかみとしては若干弱い！」

男「そういうこと言うなよ！今回作者にはこれが限界だったんだよ！」

婆『お二人さ～～～ん！　待ちなしゃれ～～～！』

女『イヤアアアアア！！

滑舌わる～い！』

男「ソコどーでもいいんだよ！悲鳴上げるポイントいちいちおかしいよね！？」

女「ババアキャラ定着させようとしてる！」

男「キャラとかじゃなくて正真正銘ババアだよ！」

婆『こりゃ！年寄りに向かってババアとはなんじゃ！』

男「うるせーよ！さっき自分でもババアって言ってただろーが！」

男「くそっ！まさか本当にいたなんて…！」

婆『これこれ、そこの少年や』

女「イヤアアァァァ！！

もう少年って年でもな～い！」

男「やかましいよ！どうせ文章だけなんだから分かりゃしねーだろ！」

女「今年で27歳！」

男「言わなくていいんだよ！だいたいこの設定いらねーし！」

婆『あれま、若く見えるけどねぇ』

男「乗っかんな！」

女「お世辞でしょ」

男「…それはそれで何か腹立つな」

婆『これ！待てと言うに！』

男「ざけんな！今止まったら何されるか分かったもんじゃねー！」

婆『何もしやせんわい！』

男「そんなの信用できるかよ！」

婆『だいたい、そんなに急いでドコへ行くつもりなんじゃ？』

男「アンタがいねートコならどこだっていい！」

婆『それならあのホテルなんてどうじゃい？』

女「イヤアアァァァ！！

　アタシの方こそ何されるか分かったもんじゃな～い！」

男「うっせーから！お前もう喋んな！」

婆『あのＨＯＴＥＬなんてどうじゃい？』

男「何で言い直した！？」

女「イヤアアァァァ！！

インターナショナルババア！」

男「お前うるせーよ！何だインターナショナルババアって！？くだらねーことにいちいちリアクションすんな！」

婆『あのＨＯＴＥＬは意外と安いんじゃよ。サービスもいいし』

男「やたら詳しいな！行ったことあんのかよ！」

女「イヤアアァァァ！！」

男「うるっせーっての！どうせ『意外にお盛んなお婆ちゃん！』とか言うんだろ！」

女「意外にお盛んなお婆ちゃん！」

男「正にその通りだったよ！そこは裏をかいてくれよ！」

男「ババア！追っかけてくんじゃねーよ！だいたい何の用だ！」

婆『落とし物を届けに来たんじゃよ』

男「嘘つけ！こちとら車なのに落とし物するわけねーだろ！」

女「あれ？何か落としましたっけ？」

男「信じるなよ！変なトコ純粋だな！」

婆『白い貝殻と小さなイヤリング』

男「それ森のく○さんじゃねーか！そんなもん持ってねーし！」

女「あらお婆さん、ありがとう」

男「乗っかんなって！」

女「お礼に歌いましょう」

男「歌わんでいい！！」

女「ララララ～ラ～ラ～ラ～ラ～～～～♪」

婆『ララララ～ラ～ラ～ラ～ラ～～～～♪』

男「歌うなぁぁ！！！どんだけノリいいんだお前ら！？」

女「ねぇねぇ、あの子ちょっとノリ悪くない？」

婆『だよね～』

男「給湯室での陰湿なＯＬのイジメみてーなことすんな！」

女「例えたねぇ～」

婆『例えたねぇ～』

男「じっくり味わうな！恥ずかしいから！」

男「これでもう用は済んだだろ！とっとと消えてくれ！」

婆『そうはいかんのじゃよ！』

男「何でだよ！」

婆『おぬしらスピード違反じゃろがい！』

男「オメーのせいだけどな！」

女「じゃあちょっとゆっくり運転しようよ」

男「何でだよ！空気読めよ！」

女「せっかくのデートなんだから、少しでも長く一緒にいたいでしょ！？」

男「急になんだよ！さっきまでそんなカンジじゃなかっただろーが！」

婆『いわゆるツンデレってやつかねぇ？』

男「ババア詳しい！さっきからちょいちょいノリ若いな！」

女「こうしておけば、たいていのバカ男は落とせるのよ」

婆『なるほどねぇ』

男「本人の前でそれ言うか！お前もう絶対誘わねーからな！」

女「あら、そんなこと言っていいの？まだ何もしてないのに」

男「そんなこと言われて何かできるほど堕ちてねーよ！」

婆『しかたないのう。ここはこのババが一肌脱いで…』

男「脱がんでいい！より深みに堕とす気か！？」

女「どん底に堕ちたらさらに掘れ！」

男「清〇か！いらんこと言うな！」

男「このままじゃキリがねー！どっか逃げられる場所はねーのか！？」

女「もう少し行けばアタシの実家があるよ」

男「おお、でかした！初めてまともな事言ったな！」

婆『おやおや、いいのかい？』

男「何がだよ」

婆『さすがに彼女の実家じゃ何もできんじゃろ？』

男「さっきからなんなの！？そんなに俺に手出しさせてーのか！？」

女「いいのいいの、どのみち何もさせるつもり無いから」

婆『あれま、悪い女だねぇ』

男「お前もう降りろコノヤロー！」

女「こんなトコで降りろとかマジ最低じゃない？」

婆『だよね～』

男「お前が最低とか言う！？ババアもいちいち乗っかんなくていいから！」

男「いつまで追っかけてくんだよ！もういいだろ！」

婆『そう言うでない。少しは年寄りの話し相手をせんか』

男「車と同じスピードで走るババアの話し相手なんか願い下げだよ！だいたいこっちは運転中だから話し相手なんかしてられる余裕はねーっつーの！」

女「イヤアアァァァ！！

ツッコミくど～い！」

男「うるせーな！テメーらがボケ倒すから俺がツッコむしかねーんだろ！」

女「このパターン割と久しぶり！」

男「確かにな！作者急に思い出したんだろ！…って余計なこと言うな！」

女「お前もな！」

男「お前って何だコラぁ！！いい加減キレるぞ！」

婆『まあまあ、落ち着かんか』

男「お前は黙ってろよ！」

婆『お前って何じゃコラぁ！！』

男「カブせてきた！」

女「う～ん、ナイスコンビ」

男「感心するな！」

婆『いやいやお嬢ちゃん、アンタのパスが良かったんじゃよ』

男「認め合うな！」

女「言うなれば？」

婆『キャプ〇ン翼の？』

女「ゴールデンコンビ？」

男「掛け合うな！例えるな！！」

婆『もしくは？』

女「テニスの王〇様の？」

婆『ゴールデンペア？』

男「打ち合わせでもしてんのかオメーら！？」

女「エーイ」

婆『エーイ』

男「ハイタッチするな！！！！もうお前ら二人だけでやってくれよ！」

女「お前って何だコラぁ！！」

婆『お前って何じゃコラぁ！！』

男「そのパターンもういいよ！」

女「…　え？　ここで終わり！？」

男「違う！その『もういいよ！』じゃない！」

婆『そろそろ終わってもいいと思うけどねぇ』

男「そんなこと言うなよ！作者一生懸命考えてんだから！」

女「でもお婆ちゃん、今回ちょっとインパクトが無くない？」

男「やめろ～！」

婆『このままじゃ終われないってやつかい？』

女「ある意味もう終わってるけどね（笑）」

男「いい加減にしねーか！ここまで作者イジりする小説聞いたことねーよ！」

男「オイ！まだ着かねーのかよ！」

女「あ、そこの信号右ね」

男「マジか！もっと早く言ってくれよ！」

女「しばらく行くと、私が人生初のデートで行った公園があるから」

男「今その情報求めてないよね！？つーか他の男の前でそんな話するとかどんだけ！？」

婆『これこれ、そう目くじらを立てるでない』

男「だっておかしいだろがよ！」

婆『女の心は海より深いんじゃよ』

男「この言葉のどこにそんな深さがあんだよ！」

婆『好きな男の腕の中でも違う男の夢を見る、と言うじゃろ』

男「それアレじゃねーか！　…え～っと…　思い出せねぇ！作者しっかりしろ～！」

女「ウェンディーカンヒーホーミーエ～～～ンジャ～～～～～♪」

男「グチャグチャじゃねーか！お前も覚えてないんかい！」

婆『私の中でお眠りな～さ～い♪』

男「だからいちいち乗っかんなよ！だいたい今眠ったら居眠り運転になるわ！」

女「…は？何そのドヤ顔。つまんないよ？」

男「ドヤ顔なんてしてねーし！」

女「小説じゃ顔は見えないからね。言ったもん勝ちよ」

男「言ったな！それなら俺にだって考えがある！　皆さ～ん！この女すっごいブサイクですよ～！！」

女「あ！何デタラメ言ってんのよ！」

男「ホントですよ～！この世のものとは思えないほどブサイクですよ～！」

女「…　この男はそんな女にいやらしい事しようとしていた不埒者ですよ～！」

男「分かった！俺が悪かった！」

婆『アンタら仲いいねぇ～』

男「どこがだよ！ほのぼのするな！」

女「…　あ！あれがアタシの実家だよ！」

男「よっしゃ！これなら何とか逃げ切れる！」

婆『おやおや、やっとこさオチかい？』

男「オチとか言わんでいい！バラすな！」

女「オチなの？」

男「そうだよ！いい加減アキてきただろ！」

婆『確かにそうだねぇ』

男「…なんか複雑な気分だな」

女「作者もいよいよネタが尽きたみたいだし」

男「そういうこと言うなっての！つーか今回作者イジり多すぎじゃね！？」

婆『そんじゃ、アタシもそろそろおいとましようかね』

男「やっとかよ…　つーかホント何しに来たんだ…」

女「ばいば～い」

男「挨拶しなくていいから」

婆『そ～れ、Ｂダ～～～ッシュ！！！！』

ドドドドドドドドドドドド……

男「…やっと行ったな。っていうかマ〇オ知ってんのか…」

女「すっごい足速いね。もう見えなくなっちゃった」

男「あの走りで手加減してたってのか…　とんでもねぇな」

女「足加減ね」

男「ソコどっちでもいいだろ！」

男「ふうっ…　やっと着いたな…」

女「ただいま～。誰かいる～？」

婆『おや、お帰り。　ふふふ、今日もアタシの勝ちだねぇ』

女「も～、お婆ちゃんってば速すぎ～」

男「思いっきり身内じゃねーか！もういいよ！」

女「…　え～っと…　コレは？」

男「ココで終わり！はい皆さんご一緒に！
　もういいよ！」
女「もういいよ！」
婆『もういいよ！』

第四説　追いかけババア（後書き）

はい、第四説「追いかけババア」編です。

実は今回あんまり自信無いんですよ。これといったネタもないままノリに任せて書いちゃったもんで…。

楽しんでもらえたら嬉しいです。

てか思ったんですけど…　この話、追いかけババアである必要無くないですか？（笑）書き終わった後に気付きました…。作者しっかりしろ～！

第五説　人面犬

ねぇねぇ…　「人面犬」って話…　知ってる？

夜中に一人で歩いているとね…

体が犬で…　顔だけ人の「人面犬」が…

話しかけてくるの…

普通は話をするだけで終わるんだけどね…

もしその時に怒らせて…　人面犬に噛まれたりしちゃうと…

同じように人面犬になっちゃうんだって…

怖いよね…

●第五説　人面犬

男「ふうっ…　残業ですっかり遅くなっちゃったなあ」

男「…しかし静かだなぁ…。こんな日は何か霊的なモノが出たりして！？　なんてね…」

『おい…』

男「！？　はい…？」

男「…　？　誰もいない…？　アレ？」

『おい…　ここだ』

男「えっ…　…え！？」

『違う、もっと下を見ろ』

男「下…？　！！うわあっ！？」

犬『そんなに驚くことはなかろう』

男「い…　犬が喋ってる！？」

犬『馬鹿者、顔をよく見ろ』

男「顔？　…　あ！ひ、人の顔…！」

犬『そういうことだ』

男「いや、そういうことって…」

犬『喋れるのも納得というものだろう？』

男「…　いや、それ以前に納得できないことが多すぎるんですけど…」

犬『何だ？』

男「いや、あの…　…あなた、何なんですか？」

犬『見ての通り人面犬だが？』

男「いやいや、おかしいでしょ！そんな『人面犬ですが何か問題でも？』みたいに言われても！」

犬『別によかろう。そんなことを言うならお前の独り言のほうがよ

っぽどおかしかったぞ』

男「ソコは別にいいじゃないですか！あれは導入として必要な処置だったんですから！」

犬『だいたい、最初に「第五説　人面犬」って言ってるんだから、わざとらしく驚くんじゃない』

男「それは本文と別の所で言ったんでしょ！次元を超越した切り返しはやめてくださいよ！」

男「それで、あの…　何か御用ですか？」

犬『ああ、そうだ。貴様が余計なことを言うから忘れるところだった』

男「僕のせいですか！？」

犬『いちいちツッコまずともよい』

男「ツッコミ無しじゃこのシリーズ成立しないでしょう！」

犬『読者も薄々「ああ、今回はこの男がツッコミ役なんだな～」と気付いているだろうし』

男「何でそういうこと言うんですか！？このシリーズのキャラクターは皆して世界観を軽視しすぎですよ！」

犬『黙れ。話が先に進まないだろう』

男「しかも今回の奴はやたら態度が尊大だし！うわ～僕ハズレだ～！」

犬『…無視して先に進むぞ』

男「…　確かにこのままツッコミ倒してたら先に進まなそうだから、ここらへんで一旦黙っておきます」

犬『うむ。お前は大人だな』

男「ありがとうございます。　…って何だこの茶番」

男「それで…　どういった用ですか？」

犬『うむ。実はとある男に追われていてな…』

男「とある男？」

犬『そう。我々のような珍しい生物を狙う者達…』

男「あなた生物なんですか！？」

犬『当たり前だろう。私が機械でできているように見えるか？』

男「いや、確かに見えませんけど…　そういうことじゃなくて」

犬『機械でできた犬はＡ〇ＢＯだけで十分だろう』

男「そういう返しいらないですから！」

犬『だいたいアレ今売っているのか？一時期大流行したそうだが、充電時間の割に稼働時間が短すぎるなどの欠点が目に付いたらしく、知らないうちに消えてしまった感があるのだが。だいたいだな…』

男「いつまでＡ〇ＢＯについて語ってんですか！てかこのくだり必要！？」

犬『まあとにかく聞け。　…とにかく私はそいつらに追われていて…』

男「…はい」

犬『もし捕まろうものなら…　それはとんでもないことになるのだ』

男「…とんでもないこと…　と言いますと？」

犬『…　それはお前…　アレだ。　……

ジャキーンとしてギュワンギュワンな…』

男「ワケ分かんないですから！宮川〇輔か！」

犬『オッペケペーでチョベリバな…』

男「死語にも程があるでしょ！そのセリフリアルに使ってる人ほとんど見たことありませんし！」

男「話が逸れましたけど…　で、僕にどうしろと言うんですか？」

犬『うむ。平たく言えば助けてほしい、ということだ』

男「…　いや、あの…　いきなり助けろと言われても…。　話がさっぱり見えませんし…」

犬『難しく考える必要は無い。そいつらに見つからないように一晩かくまってくれるだけでいいのだ。決してお前に迷惑はかけん』

男「…ホントにそれだけですか？」

犬『不満か？』

男「いや、そういうことじゃなくてですね」

犬『分かった。キスまでならＯＫにしよう』

男「だからそういうことじゃねーよ！」

犬『な！？　これだけでは足りんというのか…！　この、ケダモノめが！！』

男「ケダモノはアンタだろ！見た目からしても！」

犬『仕方あるまい！それ以上もＯＫということにしよう！どうだこれで満足か！？』

男「違うっつってんだろ！だいたいアンタを襲ったら獣〇になるだろーが！ってどぎつい下ネタやめろ～！」

犬『…とにかく、助けてもらわねばいかんのだ。何とか頼めないか？』

男「…ホントに一晩だけでいいんですね？」

犬『ああ』

男「…　分かりました。仕方ないですね」

犬『おお、恩に着るぞ！　では早速だが案内してくれないか。いつ奴らに気付かれるとも知れんからな』

男「そうですね。じゃあ…」

―　そうはいかないよ！　―

男「！？」

犬『！？　ちっ！』

「…ふふふ、見つけたよ…」

男「…　も、もしかして…　あの男の人が？」

犬『そうだ…　奴は我々人面犬を狙う珍獣ハンターの一人…

…といっても眉毛の太いあの人物とは別だぞ』

男「見りゃ分かりますよ！てか男ってさっきから言ってるでしょ！」

犬『だが気をつけろ…。　奴は眉毛の太さは普通だが…　別のところの太さはハンパじゃないらしい…』

男「別のところってドコですか！？範囲としてはだいぶ限られますけど！？」

犬『ああ、そうだな』

男「ああ、そうだな　じゃないですよ！」

犬『しかし、安易に下ネタに走るとネタ切れだと思われるからな…

…ということで奴はデブであるという設定にしよう』

男「それアリなんですか！？いくらビジュアル面での設定が無いからって好き勝手やりすぎでしょ！」

犬『くそっ！まさかこんなに早く見つかるとは…』

狩「ふふふ、計算外かい？」

犬『何故だ…？　ここまで誰にも姿は見られなかったハズ…』

狩「コイツがついに完成したんだよ」

犬『！　そ、そうか…　何てことだ…！』

男「…何ですか、あの…　機械？」

犬『あれは…　全国の人面犬の位置を把握することができる最新機器「人面犬探知機」だ』

男「それリ〇ル鬼〇っこの設定丸パクリじゃないですか！ていうか元ネタでも評判の悪い設定を何でわざわざパクるんですか！？」

犬『おい、他作品の批判は削除の対象になる恐れがあるぞ』

男「急にまともな意見！？アンタらのせいでしょうが！」

狩「ふふふ…　ねえ、君」

男「え！？　僕ですか！？」

狩「『全国の人面犬』ってところへのツッコミを忘れてるよ？」

男「そんなダメ出しいりませんから！」

狩「『全国って！そんな全国規模で生息してるのかよオイオ～イ！』
…みたいな、ね」

男「代わりにやらんでいいですから！ていうかアンタもっと敵キャラらしくしてくださいよ！」

犬『おい、ちゃんとツッコんでくれないと困るぞ』

男「うるせーよ！お前どっちの味方だ！」

犬『そいつが既に完成していたとはな…』

狩「ふふふ、これさえあれば君達のいる場所はボクに筒抜けってワケさ」

犬『くそっ…！　…ん？　…この臭いは…　ポチ男！？』

男「名前ダサッ！てか誰ですかソレ！？」

犬『私の親友の一人だ…。　貴様からポチ男の臭いがするということは…まさか…』

男「（…　一人って数えるんですか！？　っていうツッコミは空気

的にやめておこう…）」

狩「ふふふ、けっこう頑張って抵抗してきたけどねぇ」

犬『…！　やはり、貴様…！』

狩「所詮は無駄な抵抗だったってワケさ。ふふふ…」

犬『…　き、貴様ぁぁ…！』

狩「君のことも捕まえてあげるよ。あの人面犬のようにね…」

男「…アレ？こんなセリフ回しどこかで聞いた気が…」

犬『あの人面犬のように…？

ポチ男のことか…

ポチ男のことかーーー！！！！！』

男「やっぱりそうだったー！これはマズイって！マジで消されるって！」

狩「ほう！なかなかの戦闘力だな！　だがまだまだワシには遠く及ばぬわぁ！！」

男「キャラ変わってますけど！？ちゃんとキャラ定めてから来てくださいよ！」

犬『てめーは俺を怒らせた！！』

男「アンタどんだけパクるんですか！？ちょっとは自重してくださいよ！」

犬『うおおぉぉーーー！！　叫び声を上げると同時に、人面犬は疾風のごときスピードでハンターへと襲い掛かった！』

狩「ふふふっ！当たらないよ！　しかしそんな人面犬の思いをあざ笑うかのように、ハンターは余裕の笑みを浮かべながら身を翻し、その攻撃を華麗にかわす」

男「何でアンタらが状況説明してんですか！そういうのは普通セリフと別のところでやるもんでしょ！」

狩「それはね、作者に”このシリーズは全編セリフだけで書きたい”っていうこだわりがあるからさ！」

男「知りませんけども！？」

犬『そう！だからここはお前が実況中継するのが最善の策なのだ！』

男「そんなもん策でもなんでもねーよ！」

狩「古舘伊〇郎のようにね！」

男「お前うるせーよ！古舘伊〇郎に謝れ！」

狩「ふふふっ！　さあ、眠れ！」

男「あれは…　麻酔銃！？」

犬『舐められたものだな！そんなものがこの私に通用すると思うか！』

男「かわした！さすが犬の体だけあって動きが速い！」

狩「ふふふっ…　そう、こんな攻撃が当たらないことくらい計算のうちさ」

犬『…何だと？』

狩「ボクの本当の狙いは…　ほら、見てごらんよ」

犬『何…？　！！　割れた麻酔銃の弾から…ガス！？』

狩「ふふふ！そのガスを吸ったものはもれなく体が麻痺するのさ！」

犬『くっ！ふざけたマネを…！』

狩「そして、妙に声が甲高くなるのさ！」

男「それヘリウムガスじゃねーか！あれ吸っても体痺れねーし！」

犬『うおぉ～、体が痺れるぅ～（甲高）』

男「声高っ！つーか痺れ方わざとらしっ！（甲高）」

犬『お前もな！（甲高）』

男「うわぁ、なんてこった！　てか（甲高）（甲高）しつこいよ！（甲高）」

狩「ふふふっ！さあ、捕まえてあげるよ！」

犬『くっ！このままでは捕まってしまう！　おい、お前！（甲高）』

男「え、僕！？（甲高）」

犬『お前は動けるようだな！？（甲高）』

男「本来ならアンタも動けるハズですけどね！（甲高）」

犬『お前が私の痺れを何とかしてくれ！（甲高）』

男「は！？そんなん無理ですよ！（甲高）」

犬『いや、できる！古代の呪術師の血を引くお前なら！（甲高）』

男「何その取って付けた設定！？（甲高）」

犬『バトルものではこういう設定がよくあるだろうが！（甲高）』

男「アンタ、バトルもの何だと思ってんですか！？（甲高）」

犬『うるさい！いいから何がしかやってみせろ！（甲高）』

男「んな無茶な！（甲高）」

狩「ふふふ…　さあ、観念するんだね！（甲高）」

男「お前も吸ってんじゃねーか！バカなのか！？バカなのか！？（甲高）」

狩「しまったぁぁ！うおぉ痺れるぅ～（甲高）」

男「だから何で痺れるんだよ！？　てかいい加減（甲高）打つのめんどくせーし！（甲高）」

犬『！！　しめた！ガスの効果が切れてきたぞ！』

男「最初から痺れるハズはなかったけどな！」

狩「ま、まずい！（甲高）」

犬『奴はまだ痺れている！今がチャンスだ！』

男「逃げるんですか？」

犬『…　いや。仲間達の敵を討たねばならん』

狩「…く、そ…！（甲高）」

犬『この人間の…　ポチ男の…　ヤ〇チャの…　全ての人面犬達の怒りを込めた我が一撃を喰らうがいい！』

男「どっからヤ〇チャ出てきたんだよ！お前ヤ〇チャって言いたかっただけだろ！」

犬『天に滅せい、珍獣ハンター！！！！』

男「ラ〇ウ！？」

狩「く…　っそおおぉぉぉーーーーー！！！！（甲高）」

一

二

三

四

五

六

七

八

九

狩「ぐぅおおおぉぉぉぉぉーーーーー！！！！（甲高）」

男「これ完全にあの技じゃねーか！明治時代を舞台にした大ヒット漫画のパクリじゃねーか！！もうどうなっても知らんぞ！！！！」

犬『頬の十字傷がヤ〇チャと一緒なのでな…』

男「だからヤ〇チャ関係ねーんだよ！」

狩「く…　ふふ、ふ…。　なかなか、やるじゃないか…（甲高）」

男「！？　あの技→を喰らってまだ生きてる！？」

狩「だが…　ボク一人を倒したくらいじゃなにも変わりはしない…。いずれ君達は捕まり…　ジャキーンとしてギュワンギュワンな目に遭う運命なんだ…（甲高）」

男「ホントにそんな目に遭うのかよ！じゃあ最初に言ってたことは正しかったんかい！」

犬『…　私は決して捕まりはしない…。たとえこ〇亀の連載が終了しようともな…』

男「例えおかしいだろ！確かにそれなら捕まらなさそうだけども！」

狩「…せ、せいぜい長生きするんだね…。　く、ふふふ…　ふ…ウボァーーー！！！！（甲高）」

男「最後までパクリ倒しじゃねーか！いい加減にしろ！！」

犬『ありがとう。お前のおかげで助かった』

男「僕何もしてませんけど…」

犬『そんなことはない。お前がいなかったらどうなっていたことか…』

男「…　まあ、そういうことでいいですよ」

犬『…　お前、名前は？』

男「僕ですか？　…　タツヤ、です」

犬『そうか。改めて礼を言わせてくれ。　ありがとう、カズヤ』

男「カズヤじゃねーよ！今聞いたばかりで何故間違える！？」

犬『では、私は行かせてもらおう』

男「どこに行くんですか？」

犬『さあな…。だが、もう会うこともあるまい。　…さらばだ』

男「待ってください！

…あなたの名前は？」

犬『私か？

……

ヤ〇チャだ』

男「嘘つけ！！　もういいよ！」

第五説　人面犬（後書き）

はい、第五説「人面犬」編です。
ん～、実は今回もちょっと自信無いんですよねえ。クスリとでも笑っていただければ嬉しい限りです。

この話は、人面犬と珍獣ハンターのバトルにしよう、という構想をまず始めに思いつきまして…　で、その中で例の「るろ○に剣○」の技をパロって使うことを思いつきまして…。　で、「それならいっそパロしまくりの話にしちまえ！」…ってことでこんな話になりました。今回ばかりはさすがにヤバイと思ってます。本当です（笑）

しかし…　まさかヤ○チャがオチに来るとは作者にも予想外でした（笑）このシリーズはいつも作者の予想を裏切ります…。ってソレどんな小説だ（笑）

第六説　怪人赤マント

ねぇねぇ…　「怪人赤マント」って話…　知ってる？

怪人赤マントは男子トイレに出る妖怪で…

『赤いマント青いマントどっちがいい？』って聞いてくるの…

赤いマントって答えると…　まるで赤いマントを羽織ったように血まみれで殺されて…

青いマントって答えると…　全身の血を抜かれて…

青いマントを羽織ったように全身真っ青にされて殺されるんだって…

怖いよね…

●第六説　怪人赤マント

「…　夜の学校って不気味だなぁ…」

「けど、本当に『怪人赤マント』なんて出るのかなぁ？　勢いで調べてやるとは言ったものの、何も出なかったらどうしよう…？　ビビって行かなかったんだろ！　とか言われるのもシャクだよなぁ…」

「え～っと…　確かここのトイレの…　４番目の個室、だったよな」

…　…　…

「…　何だ、何も出ないじゃないか…。　結局はただの噂、か…」

…　赤いマント、青いマント…　どっちがいい？　…

「！！　えっ！？」

…　赤いマント、青いマント…　どっちがいい？　…

「…　上から…　…聞こえる…！？」

『赤いマント、青いマント、どっちがいい？』

「！！！！　う…　うわぁぁぁっ！！！！！」

『赤いマント、青いマント、どっちがいい？』

（う…嘘だろ…！？　まさか本当に出るなんて…！？

…こ…　…殺される…！！）

『あ、ひょっとして赤とか青とかの原色系はお嫌いですか？』

「…　…は？」

『でしたら、他の色も多数ご用意させていただいておりますが…』

「え！？　あ、ちょ、ちょっと待ってください」

『はい、何か？』

「あの…　え～っと…　…　怪人赤マント、さん、ですか？」

『左様でございます。我が「ＳＨＯＰ　怪人赤マント」へようこそ、お客様』

「は！？　しょ、ショップ！？」

『はい。私経営者兼従業員の「怪人赤マント」でございます。よろしくどうぞ』

「違う！そうじゃなくて！」

『どうかなさいましたか？』

「いや…　…え？こういうアレなんですか？」

『はい。最近はあまり物騒ですとお客様にご利用していただけないので…』

「え？　それでこういう感じに？」

『はい。せめてものサービスといたしまして、お客様のご希望に沿った死に方をしていただこうと思いまして』

「死に方って！一番物騒なとこそのままにしてどうすんですか！」

『そう申されましても、ご来店いただいたお客様を殺すのが私めの仕事でございますので』

「それじゃ結局ご利用いただくのは難しいと思いますけど！？」

『そうおっしゃらずにお客様、せっかくですからぜひ見ていってくださいませ』

「…　ってことは最終的には僕も死ぬのか…。はぁ、なんでこんな

目に…」

「…それで、え～っと…　さっき他の色もあるとか言ってましたよね」

『ええ。やはり赤とか青はあまりお好きでない…？』

「いや、そういうわけじゃないんですけど」

『でしたらこちらの”紫”などいかがでしょう？』

「紫？　それはどういった…？」

『はい。こちらはお客様が死ぬまでお客様の背中をひたすら殴り続ける、というコースになっております』

「それだいぶ時間かかりませんかね！？」

『あ、お客様はサッと死ねるコースがお好みでいらっしゃいますか？』

「そういうことじゃねーけどよ！」

『でしたら、お客様にこちらの毒薬を飲んでいただく”お手軽紫コース”もご用意させていただいておりますが』

「軽い感じで言うな！だいたいそんな毒薬むざむざ飲むワケなくね！？」

『う～ん、お客様に紫は合わないようですね』

「合うもクソもないような気がしますけどね、この場合」

『でしたらお客様、こちらの”緑”はいかがですか？』

「緑？　どんなもんか全然想像つかないんですけど…」

『こちらはですね、まずはお客様に普通に死んでいただきます』

「…はあ」

『その後、私がお客様の背中をペンキで緑に塗るという…』

「それ緑全然関係ないじゃないですか！思いっきり後付けじゃないですか！」

『緑に染まったお客様の死体を見て、目撃者達は緑色によって植物の癒し的な効果を得られるという…』

「癒されるか！その状況で癒される目撃者が一番怖いわ！」

『緑色には癒しの効果があるのだよ』

「それ黒○のバスケの緑○じゃねーか！なんでもかんでもすぐにパクるんじゃない！」

『このボケ伝わるかどうか微妙なのだよ』

「やかましい！余計なこと言うな！」

『緑もダメですか～』

「緑がダメっていうか、全体的に色々ダメですけど」

『でしたらお客様、ちょっと目線を変えて女性的な色にしてみるのはどうでしょう？』

「女性的な色？」

『はい。　こちらの”オレンジ”などオススメですよ』

「オレンジ？これまたワケ分かんないのきましたね…」

『こちらはですね、まず屋上に移動します』

「はい」

『そして夜が明けるころに死んでいただきまして…　お客様はオレンジ色の朝日をバックに死んでいる、という…』

「無駄にカッコイイ！ドラマとかではありそうなシチュエーションだけども！」

『あ、ひょっとして立ったまま死んでられるか心配してらっしゃい

ますか？』

「んなこと心配するか！」

『その点はご心配無用でございます。そちらの処理は私めのほうでサービスさせていただきますので』

「だからそうじゃねーっての！」

『ポーズも色々お選びいただけます。ラ〇ウの昇天ポーズですとか、ジョ〇ョっぽいポーズですとか…』

「どーでもいいわ！だいたい発見される頃にはもう太陽昇りきってるだろ！」

『……　　あ！』

「今頃気付いたのかよ！」

『おっしゃるとおりでございます。本社のほうに改善要求を出しておきますので…』

「本社！？まさかの大所帯！？」

『う～ん、なかなかお気に召すものがありませんねぇ』

「お気に召すことは永遠に無いと思いますけど」

『単色でダメならお客様、柄物はいかがでしょう？』

「柄物？」

『こちらの”虎柄”はオシャレで人気も高いですよ』

「…虎柄…？」

『はい。こちらはですね、まずお客様に阪〇タイ〇ースファンになっていただきます』

「阪〇関係なくないですか！？」

『で、死んでいただきます』

「あっさり死んじゃった！タイ〇ースファンになる必要無いじゃないですか！なんで1ステップ挟んだ！？」

『バー〇の退団を惜しみながら死んでくださいませ』

「いつの話をしてんだよ！いい加減バー〇のことは吹っ切れ！」

『う～ん、虎柄でもダメとなると選択肢が限られてきますね～…』

「もういいですって…」

『ならですね、ちょっとゴージャスに”ヒョウ柄”などいかがでしょう？』

「ヒョウ柄…？　そんなの可能なんですか？」

『はい。ヒョウ柄のマントを羽織って死んでいただきます』

「あっさり言ってくれるよなあ…」

『ただ、お客様にヒョウの毛皮をご用意していただく形になりますが』

「何でだよ！おかしいだろ！」

『お客様にアフリカまで行っていただいて、本物のヒョウの毛皮を取ってきていただきます』

「何だそのムチャ振り！電波〇年の企画か！」

『交通費等の費用はこちらで出させていただきますので』

「そういう問題じゃねーんだよ！　何で殺されるって分かっててわざわざアフリカまでヒョウの毛皮を取りに行かなくちゃならねーんだ！」

『じゃ、このアイマスクをつけてください』

「だから電波〇年かっての！」

『う～ん、お客様一筋縄じゃいきませんね～』

「いってたまるかよ…」

『ここは一度基本に立ち返りまして、こちらの”ストライプ柄”などはいかがですか？』

「ストライプ、ですか」

『こちらはですね、まずお客様の背中に引っかき傷をつけます』

「はい」

『それから死んでいただくという手順になりますね』

「ちょっと待ってください」

『はい？』

「それ逆のほうがよくないですか？」

『？』

「だってほら、背中引っかかれるのって痛いじゃないですか。
まず始めに死んで、それから引っかき傷をつけたほうが痛くなくていいと思いますけど」

『…　おぉ～』

「え！？感心されてる！？」

『お客様…　かなりセンスがいいですね…！』

「え、え！？」

『素晴らしいですよ！ぜひ我々の会社に来ていただきたい！』

「え！？なんか話がおかしな方向に向かっていってる！？」

『お客様、今就職活動のほうはなさってますか？』

「え、ええ、まあ…　一応…」

『でしたらお客様、ぜひ一度当社の入社試験を受けていってください』

「入社試験！？」

『何でしたら、私のほうから推薦状を書かせていただきますので』

「いやそういうことじゃなくて！」

『こうしてはいられない！　さっそく社長に報告させていただきます！』

「ダイレクトで社長！？　いやいやちょっと待ってくださいよ！入りませんって！」

『ええ～？　そう言わずに～』

「入るわけないでしょう！だいたい僕普通の人間ですし！」

『…　そうですか…　残念です…』

「何で残念がられてるんだ…」

『お客様…　申し訳ございません。当店の商品にはお客様を満足させられるものは無いようです』

「え！？　じゃあ帰っていいんですか！？」

『誠に不本意ですが…　そういうことになります』

「（ラッキー、助かったぁ！）」

『今後はお客様のご希望に沿った商品をご用意できるよう、まい進しますので…』

「いやいや、もういいですから！終わったんなら帰りますよ！」

『誠に申し訳ありませんでした』

「いえいえ！　それじゃ！」

『あ、お客様！』

「え！？　な、何ですか！？」

『こちらをお持ちください』

「何ですかコレ？　…　赤いマント？」

『ノルマは一日１０着です。頑張ってくださいね』

「勝手に社員にされてる！？」

『いえいえ、まずはバイトからですよ』

「そういう問題じゃねー！　もういいよ！」

第六説　怪人赤マント（後書き）

皆さんお久しぶりです。かなり久々に新作ができました。

この話は、赤マントをショップ店員にする、というアイデアを膨らませて作りました。作者にしては珍しく、最初から方向性が決まっていた話です。

ま、ネタとして決まっていたのは阪〇タイ〇ースのくだりだけなんですけどね（笑）

ところで、怪人赤マントは都市伝説の部類に入るんでしょうかね？　何となく怪談の部類に入りそうな気がしなくも無いですが…。

ま、別にそんなとこまでこだわるような小説でもないんですが（笑）

第七説　三本足のミカちゃん人形（前書き）

今回の「三本足のミカちゃん人形」の元となった話は「三本足のリ〇ちゃん人形」という都市伝説です。

しかし「リ〇ちゃん人形」は実際に存在するため、今作では「ミカちゃん人形」と名前を変えてお送りします。ご了承ください。

第七説　三本足のミカちゃん人形

ねぇねぇ…　「三本足のミカちゃん人形」って話…　知ってる？

三本足のミカちゃん人形はね…　足が三本あるミカちゃん人形で…

拾った人に…　『私ミカちゃん。呪われてるの』って話しかけてくるの…

それでね…　その人形を拾った人には…

その後必ず不幸が訪れるんだって…

怖いよね…

●第七説　三本足のミカちゃん人形

英子（えいこ）（仮名）「…はぁ～っ…。　今日こそはうまくいくと思ったの

になぁ…。
何よあの男！　さんざん思わせぶりな態度しといて！
他の男はずっと胸元チラ見してるし！ホント、ロクな男がいないんだから！」

「あ～…　ヤケ酒気味に飲んだから頭痛いわ～…。　…早く帰ろ…」

「…　ん？　…何かしらコレ…　人形？」

「…ど～せ家に帰っても誰もいないし…　…持って帰ろうかな」

…　…　…

「ただいま～　…　っつっても誰もいないけどね～…。　ど～せ寂しい独身女ですよ～だ…」

「は～い、お人形ちゃんはここで待っててくださいね～。

…　あ～、ダルい…。　…　メイク落としてこよ」

…　…ウフフフ…　…

「！？　誰っ！？」

「…　誰もいない…　わよね…？」

…　…ウフフフフフ…　…

「えっ！？　…ちょっと…　何なのよ…！！　誰かいるのっ！？」

『キャハハハハハハハハハハッ！！！！』

「！！！！　キャアアアアーーーーッッ！！！！！　…　に…
人形がっ…！！？？」

『こんにちは…私ミカちゃん…。　…呪われてるの…　呪われてるのぉ！』

「い…　イヤアアアアァァッ！！！！！」

『痛っ！』

『…ちょっ…　ちょっとアンタ！　なにも蹴っ飛ばすことないじゃないの！』

「え！？　…　え？」

『マジありえな～い！　こんなヤツ初めてだわ～！』

「は！？え！？　な、何！？」

『何じゃないわよ！　も～、首もげるかと思ったじゃない！』

「え！？　…ちょっと…　何なのよ！」

『だから！私ミカちゃんって言ってんでしょ！』

「そうじゃなくって！　何で人形が普通に話しかけてきたり、勝手に動いたりするのよ！」

『はぁ？　…　ほら、よく見てみなさいよ』

「え？　…　！！　足が…　三本！？」

『そ。アタシが”三本足のミカちゃん”なのよ。聞いたことくらいあるでしょ』

「あ、あるけど！」

『だったらギャアギャア騒がないのっ！いま何時だと思ってんのよ！』

「騒ぐに決まってるでしょ！？何よこの状況！？」

『やかましいわね！タイトル読んだ段階でこのくらいの状況は想定

しときなさい！』

「何よタイトルって！？」

『次元を超越した切り返しってヤツよ！人面犬の時もやったでしょ！』

「ちょっと！世界観を崩壊させるネタはやめなさいよ！」

『あ～も～、うるさいわね！』

『いい加減落ち着いた？』

「え、ええ…　一応ね…」

『はぁ…。　のっけから失敗しちゃったじゃないのよ、もう…』

「…　ね、ねぇ…　ちょっと聞いてもいいかしら？」

『何よ？』

「あなた…」

『あ、ミカでいいわよ』

「え？　あ、うん。　…ミカってさぁ…」

『うん』

「…　…何？」

『…ずいぶん漠然とした質問だわね…』

「だってさ、どう考えても普通の人形じゃないでしょ！？」

『そりゃそうよ。　…　ん～…　一応、妖怪ってことになるのかしらね』

「よ、妖怪！？」

『まぁね』

「……　ふ、ふ～～～ん…」

『…何よ、何か言いたそうじゃない』

「いや…　…ちょっとイメージと違ったから…」

『どの辺りがよ？』

「…　喋り方、とか」

『ああ…　…あんなブリッコな喋り方してらんないわよっ』

「そうなの？」

『そうよ。元ネタの商品のイメージがあるからやってるだけで…
そうじゃなかったらあんな喋り方ゴメンだわ』

「そうなんだ」

『ホンマはな、関西弁とかで喋りたいねんで～』

「いくら何でも無理があるでしょ！ていうか嘘くさっ！」

『ホンマに普段は関西弁どすえ～』

「それ京都弁だし！無理矢理キャラ付けしなくていいから！」

『キャラじゃなくて天然でごわす！』

「いきなりの九州弁！？　てか九州人ってホントにこんな喋り方するの！？」

『分からないだっぺ』

「茨城弁のつもり！？使い方間違ってるから！」

『あーもー分かったわよ！アタシが悪かったわよ！　ゴメンねゴメンね～～～！！』

「栃木弁！　ってか最早ただのギャグ！」

「…　ねえ、ミカ…　ちょっと足開きすぎじゃない？」

『？　いいじゃない、女同士なんだから』

「イメージが大事なんでしょ？　そんな座り方じゃパンツ見えるわよ」

『大丈夫よ。　ほれ』

「…　あ、三本目の足が…」

『そ。コレを真ん中に置いとけばパンツは見えないでしょ』

「…　なるほど」

『三本目の足もたまには役に立つのよ♪』

「…そもそも何で三本なの？」

『シッポが進化してこうなったのよ』

「シッポ！？」

『そうよ。アタシ元はサイ○人だから』

「嘘つけ！だいたいサイ○人は全員黒髪よ！」

『あ、アタシはデフォルトで超サイ○人なのよ』

「バーゲンセールにも程があるでしょ！」

『しかも3』

「ああ～髪が長いからね～　って、そんなワケあるか！」

『もうこの変身に慣れているんだ…』

「慣れるな！どんだけ天才なのよアンタは！」

『あ、そうだ。アンタ名前なんていうの？』

「え？　…　英子、だけど」

『英子、ね。　なかなかいい名前じゃない』

「そうかな？ありきたりだと思うけど」

『そんなことないわよ。　でさ、英子』

「何？」

『アンタ、ずいぶん機嫌悪かったみたいだけど、何かあったの？』

「ああ…　…ちょっと合コンがうまくいかなくってさ…」

『へ～、合コンとか行ってんだ？』

「まぁね。この歳で独り身はちょっと、さ」

『いくつになるの？』

「今年で２８よ」

『あら、もっと若く見えるけど』

「え？　…そ、そうかな？」

『ええ。１６くらいに見えるわよ』

「それは明らかにお世辞よね！？なんちゃって女子高生もはなはだしいわ！」

『大丈夫よ。学園モノのＡＶ男優よりは自然だから』

「比較対象が悪すぎるでしょ！確かにアレは不自然極まりないけども！」

『やけに詳しいわね？』

「独り身ですから。　…て何を言わせんのよ！」

『欲求不満なの？』

「違うわよ！　ちょっとやめてよ、もう！」

『でも意外ね？　モテそうなのに』

「そんなことないわよ…」

『だってアンタ、見るからに胸大きいじゃない』

「そんなんで寄ってくる男なんかイヤよ」

『武器になるものはどんどん使ったほうがいいわよ？アタシもこの三本目の足にはだいぶお世話になったもの』

「そうなの？」

『そうよ。今のカレはこれで捕まえたようなもんだから』

「…どういうこと？」

『この足で○○○○○してください！　って告白してきたのよ』

「ただのド変態じゃないの！　つっても伏字だから読者には伝わらないだろうけど！」

『そう、変態なのよ』

「あっさり言った！それでいいんだ！？」

『男なんて多かれ少なかれ皆変態なんだから』

「…結構ただれてるのね…」

『ねえ、英子。何か飲み物もらってもいいかしら？』

「え？　…いいわよ。何がいい？」

『そうね～…　アセロラドリンクとかあるかしら？』

「…意外なもの飲むのね」

『アセロラドリンクはおハダにいいのよ』

「おハダ気にしてるの！？人形なのに！？」

『ほら、アタシって妖怪じゃない？』

「うん」

『設定上、どうしても夜中に動くことが多いからさ。おハダが荒れるのよね～』

「だから！何で人形なのにおハダが荒れるのよ！」

『レディだからよ！』

「全くもってしっくりこないわよ！」

『アンタもこんな夜更かししてたら、すぐに砂漠のような肌になるわよ！』

「夜更かしの原因が何を言う！？」

『砂漠化しきってから対策立てても遅いんだから！』

「失礼ね！　パックとか化粧水とかの対策はしてるわよ！」
『あら、意外と気ぃつかってるんじゃない』
「ミカもやればいいでしょ」
『アタシは無理よ。構造上ヒジが曲がらないの、アタシは』
「…　そ、そう」

「はぁ…。　ねえ、お風呂入ってきていいかしら？」
『あ、アタシも入る』
「えぇ！？」
『何よ』
「だって…　…人形なのに…」
『人形である前にレディなのよ！』
「何でもかんでもレディで済ませないでよ！」
…　…　…

「…　ふぅっ…」

『気持ちいい～！久しぶりにお風呂入ったわ～』

「ミカ、お湯に浸かって大丈夫なの？」

『大丈夫よ。そこらの人形と一緒にしないでちょうだい』

「…　ま、そうね」

『しかしアンタ、ホントに胸デカいわね～』

「な！　…ちょっ！　触んないでよ！」

『おぉ～♪』

「らめぇ～！」

※しばらくお待ちください

「…　はぁ…　はぁ…。　…　ぜ、全然ゆっくり入れなかった…」

『さっぱりしたわぁ～♪』

「…　ふわぁ～～～…っ…　…　アタシ、もう寝るわね」

『あら、そう』

「…　一応聞くけど…　…帰らない、わよね？」

『当然』

「…　あ、そ…。　…ミカは寝ないの？」

『アタシはほら、一応ミカちゃん人形だからね。目ぇ閉じらんないのよ』

「…　なるほど」

『おやすみ、英子』

「おやすみ」

『じゃ、布団の中で好きな人教えてね』

「修学旅行か！」

「（…ん…？　何かしら…　…声が、聞こえる…）」

…　ウフフフフ…　…

「（…　ミカ…？）」

…　ウフフフフフフ…　…

「（ミカ…　…あれは…

…　包丁！？）」

『…　ウフフフフフフフフッ……！！　…　ねえ、英子…？』

「（！！…　い　…　嫌…ッ！　来ないで…！）」

『英子！　ほら、早く起きて！朝ごはん作っといたから！』

「…　え？」

『ほらっ！　早く食べないと冷めちゃうでしょ！』

「え？　…　どうして朝ごはんを？」

『世話になりっぱなしってわけにもいかないでしょ？』

「…　そ、そう…。　…　料理、できるんだ…」

『馬鹿にしないでよ。たとえ三本足でもアタシは”女性人形界のエリート”ミカちゃん人形よ？』

「エリート…」

『そうよ。言うなればベジー○ね』

「まだサイ○人ネタ引っ張ってたの！？」

『さ、早く食べて！　今日はご飯とワカメ味噌汁、焼き魚ときんぴらゴボウ、たくあんよ』

「純和風！？見た目に似合わず！？」

『いただきまーす！』

「…　アレ！？　これ全部ミカちゃん人形サイズじゃない！」

『当たり前でしょ。人間サイズじゃアタシ食べられないもの』

「やっぱりコイツ自分勝手だ！」

『ベジー〇ですから』

「やかましい！　もういいよ！」

第七説　三本足のミカちゃん人形（後書き）

はい、第七説「三本足のミカちゃん人形」です。

今回の話は苦労しました…。　書く前は書きやすい設定だと思ってたんですけど、書いてみたら単なる女子二人の座談会みたいになっちゃいまして…。

これじゃ笑えない！　と思って、大幅に書き直して現在のような形になりました。

オチもいまいちですし、個人的にはあんまり好きな話じゃないですね。ベジー〇には悪いですが（笑）

ま、次回を楽しみにしてくださいってことで。

第八説　ベッドの下の男

ねぇねぇ…　「ベッドの下の男」って話…　知ってる？

ある女の子がね…　飲み会が終わった後…

友達の部屋に泊まることになったの…

友達の部屋に着いて…　少し話をした後…

布団を敷いて横になったの…

そしたらね…　友達の寝ているベッドの下から…

男がジッとこっちを見ていたんだって…

怖いよね…

●第八説　ベッドの下の男

A子「ただいま～。　ふぃ～、すっかり酔っ払っちゃったぁ～」

B『も～、調子に乗って飲むからよ！』

A「えへへ～、な～んか気分よくってさ」

B『そうみたいね～。お気に入りのカレとけっこう話できたみたいじゃん』

A「ちょっとやめてよ～！恥ずかしいじゃん！」

B『よ～く言うわよ！ノリノリだったくせに～♪』

A「やめてったらぁ～♪」

…　…　…

…　俺は、ベッドの下の男　…

…　今回のターゲットは、飲み会帰りの女二人　…

…　久々に脅かし甲斐のありそうな奴らだ。ワクワクするぜ　…

「…　そういや、今回は新人の面倒も見てくれって言われたんだよな…。どんな奴だろうな？」

『…　あの～、すいませ～ん…』

「ん？　ああ、キミが新人の？」

『はい！　今日からベッドの下に配属になりました。よろしくお願いしまッス！』

「ちょっと、新入り君」

『はい？』

「挨拶する時は立ってしなさいよ」

『立てないッスよ！ここベッドの下なんスから！』

「まったく、最近の若いモンは…」

『あ、自分若いんスか！？』

「ああ。２３くらいと思ってくれればいい」

『年齢設定いらないッスけどね！使いませんし！』

「でもキミ、来るの早いね」

『はい！先輩がスタンバイする１０分前には来ていたッス』

「ほぉ～、なかなか感心な心がけだな」

『ありがとうございます』

「だが、まだ甘い」

『え』

「俺が新人の頃は、仕事が始まる３０分前にはスタンバイしてたぞ」

『早すぎないッスか！？初デートの待ち合わせじゃないんスから！』

「…おい…　俺をバカにしてるのか？」

『はい！？』

「初デートの待ち合わせは2時間前スタンバイに決まってるだろうが！」

『いくら何でも早すぎるッスよ！何かトラブルが起きてもまだ余りますよ！』

「そして、ちゃんと時間通りに来た女の子に激ギレしてな…。　…懐かしい」

『タチ悪すぎるでしょ！』

『もしかして、遅刻してくる人とかもいるんスか？』

「ああ、まあな…。　以前のヤツなんか思いっきり遅刻してきて…」

『はい』

「部屋に入ることすらできなくて…　そのまま半泣きで帰ってったな」

『部屋入れなくなるんスか！？』

「当たり前だろお前…　ターゲットより早く部屋に入っとかないといけないからな、俺らは」

『ああ…　そりゃ確かに無理ッスね』

「だろ？　ターゲットより後に入ったら、ただの訪問者になっちまうからな」

『全然怖くないッスね』

「ま、中にはいたけどな。普通にインターフォン押して入ろうとした奴も」

『ええ！？どんだけ猛者なんスかその人！？』

「ま、ベッドの下には入れなかったけど」

『当たり前ッス！』

「留置所には入れたけどな」

『留置所！？　え！？捕まったんスか！？』

「そりゃ捕まるだろ」

『えぇ～…　変なトコだけ現実的ッスわ～…』

「俺らはほら、現実の人間って設定だからな。下手なことしたら捕まるんだよ」

『はあ…』

「…　ま、留置所にもベッドはあるから心配すんな！」

『そんな状況下になってまでベッドの下に入りたくないッスわ！』

B　…　じゃあ飲み直そっか！　…

A　…　うん！　かんぱ～い！　…

『…　まだ寝ないみたいッスね』

「…こればっかりはしょうがねえな」

『けっこう暇ッスね～。もっと緊張するもんだと思ってたッスけど』

「まあ、向こうがこっちに気付くまで、こっちからは何もできねぇからな」

『先輩は暇な時はどうしてるんスか？』

「ん？そうだな…　ケータイでマージャンしてることが多いかな」

『そんなのアリなんスか！？』

「他にも色々やるぞ。アイ○ォンのアプリは色々あるからな」

『先輩アイ○ォン使ってるんスか！？』

「まあな。やっぱ今時アイ○ォンくらい持っとかないとな」

『なるほど～…』

「アイ○ォンだと合コンの時の女の子の食いつきがいいんだよ」

『合コンとか行くんスか！？』

「そりゃ行くよお前。こちとら女の子が好きだからこの仕事してるようなもんだしな」

『はぁ…　確かにそれはあるッスけど…』

「あ、そうだ。合コンで写メった女の子の胸を揺らしたりもしてるな」

『何やってんスか先輩！？』

「そういうアプリがあるんだよ。楽しいぞ？」

『知らないッスけど！？』

「こないだすげぇ巨乳の子が来てなぁ～…。最近はその子を揺らしまくってるよ」

『先輩！自重！』

「名前はなんていったかなぁ…。　結構ありきたりな感じの…」

『もういいッスって！』

B　…　でさぁ、カレのメルアドくらいは教えてもらったの？　…

A　…　へへ～ん、まぁね～♪　…

B　…　ちゃっかりしてるぅ～　…

『…　しばらく寝そうにないッスね』

「我慢だ我慢。この仕事は忍耐力が大事だからな」

『自分あんまり待つの得意じゃないッスから、大変ッスわ～』

「今回はまだいい方だぞ。これでターゲットが男と女だとキツイんだ」

『どうしてッスか？』

「考えてみろ。　男と女が酔っ払って帰ってきたとするだろ？」

『はい』

「したらよ…　最終的にそいつらベッドの上に来て…」

『…はい』

「で…　そいつらがベッドの上で〇〇〇〇してるのを、一晩中ず～っと聞いてなくちゃならねぇんだよ」

『うわ…』

「キツイぞ～。ベッドの下だからよりリアルに伝わってくるしな…」

『それしんどいッスね…』

「しかもな…　男に変な趣味があると更にキツイんだ…」

『え』

「こないだ行ったとこではな、『君の〇〇〇はまるで〇〇〇〇のよ

うだね』とか言ってたし…」

『先輩！？』

「他には『〇〇〇されて〇〇〇〇〇〇にしてるじゃねぇか！この〇〇〇〇が！』なんてのもあったし…」

『先輩！ちょっと！』

「極めつけは、女の〇〇〇に〇〇〇〇〇を〇〇〇〇〇〇〇してる音が聞こえてきたり…」

『先輩！もういいッス！』

「何だ、ここからもっとエグくなっていくのに」

『これ以上エグくなるんスか！？』

「そうだぞ。『〇〇〇〇が〇〇〇〇〇〇〇…』」

『ダメですって！　見てください、伏字だらけで何がなんだか分かんないッスよ！』

「おお、ちょっとおイタが過ぎたかな…？」

『過ぎたッス！』

A　…　…ふぁ～～～っ…　なんか疲れちゃったな。　お風呂入っ

てくるね～　…

B　…　あ、アタシも一緒に入る～　…

A　…　え～、変なトコ触んないでよ～　…

『先輩、風呂入ってくるみたいッスよ』

「ああ、聞いてた。　ヤツらが風呂に入ったら一旦外に出て休憩するか」

…　…　…

「よし、行ったみたいだな…。

どうだ新入り、ここまでの感想は？」

『いや～、思ってたよりキツイッスね～』

「まあ、慣れてくりゃそうでもなくなるからよ。色んな家に侵入して、とにかく経験を積むことだな」

『そういえば、先輩はいつからこの仕事してるんスか？』

「ん？　…そうだな～…　今年で5年目になるか」

『あ、じゃあもうけっこう長いんスね』

「アマチュア時代を含めれば8年」

『アマチュア時代！？プロとかアマチュアの概念があるんスか！？』

「ああ。　俺らみたいに他人の家に侵入するのがプロ」

『はあ』

「自分のベッドの下に潜るのがアマチュアだ」

『それ単なる趣味じゃないッスか！趣味と呼ぶのもどうかと思うッスけど！　てかそんなの3年もやってたんスか！？』

「アマチュア3年目はセミプロと呼んでもいいくらいだったけどな」

『更なる段階が存在した！　え！？セミプロ！？』

「知り合いのベッドの下に潜るんだ。　ま、肩書きとしては非公式だけどな」

『非公式もクソも無いような気がしますけど！？』

B　…　ちょっとA子～、アンタまた胸大きくなったんじゃない？

…

A　…　あ！ちょ、ちょっと！そんなトコ触んないでよ～！　…

B　…　おぉ～、やわらか～い♪　…

A　…　やめてったらぁ～！　…

『…　せ、先輩…。　…なにやら盛り上がってますね…』

「みたいだな」

『てか、どっかで聞いたことないスか？　この感じ』

「作者が好きな描写なんだろうな」

『作者…』

「さすがはド変態作者だ」

『…　でも、自分ちょっと興奮してきちゃったッス…』

「おいおい、だらしねぇな。このくらいで慌てるんじゃねぇよ」

『先輩は平気なんスか？』

「まあな。さすがに5年もやってるとこのくらいじゃピクリともしねぇよ」

『さすがッスね～…』

「俺も最初の頃はヤバかったけどな」

『先輩にもそういう頃があったんスか？』

「そりゃあったよ。けどな、こういうのはあらかじめ対策を立てておけばいいんだ」

『対策、ですか？』

「ああ。一番手軽なのはポケットティッシュを用意しておくことだな」

『ポケットティッシュ！？』

「ああ。どうしても我慢できなくなった時にサッと済ませるんだよ」

『ベッドの下でそんなことするのが可能なんスか！？』

「まあな。ちゃんと使用済みのティッシュは持ち帰るんだぞ」

『空しいッスね…』

「しょうがねぇだろ。残しておくワケにもいかんし」

『まあ、そうッスね』

「ま、現場に残しとくってのもある種興奮するけどな…」

『先輩！？』

「冗談だよ」

『勘弁してくださいよ～…』

「いざという時にすぐできるよう、あらかじめ自分の家のベッドの下で練習しておけ」

『…それもかなり空しいッスね…』

「しょうがねぇんだって。これも仕事のうちなんだよ」

『はぁ…』

「！　そろそろ出るみたいだな…」

『え！』

「慌てるな。落ち着いてベッドの下に戻れ」

『はい！』

A　…　ふ～、さっぱりしたぁ～。　そろそろ寝よっか　…

B　…　そうね～　…

『…先輩…　いよいよ寝るみたいッスね…』

「そうだな…」

『こ、ここからどうしたらいいんスか！？』

「お前は今日が初めてだよな？」

『はい』

「だったら、今回は何もしなくていい。俺のやり方を見ておけ」

『…　了解ッス！』

A　…　おやすみ～　…

B　…　うん、おやすみ～　…

「（…　しかしやけに小さい布団だな…。　どんな女なんだ…？）」

B『…　…え？…　…ベッドの下に…　誰か、いる…？』

「（ここだ！　…ここでメチャ怖いキメ顔を一発…！）」

B『キャアアァァーーー！！！！！

ちょっとアンタ！ここで何してんのよ！！』

「（え！？）」

B『ちょっとA子！ベッドの下！』

A「え！？　何、どうしたの！？」

「（え！？　ど、どういうことだ！？）」

『（せ、先輩！？）』

B『いつまでそんなトコにいんのよ！　さっさと出てきなさい！！』

「え！？　う、うわっ！　ちょっ！」

A「キャー！　何よこの人！」

B『なんでこんなトコにいるの、アンタ！？』

『（せ、先輩！何がどうなってるんスか～！？）』

「…　…あ！

み、ミカちゃん！？」

ミカ『ねえ、何してるわけアンタ！？　一体どういうことなのかしら！？』

英子「…　ミカ…　…この人、知り合い？」

ミ『私のカレよ！　アンタ、まだこんなことしてたワケ！？』

英「あ、この人が例の…」

「み、ミカちゃん！ちょっと落ち着いて話をしよう！ね！？」

ミ『もう辞めたって言ってたよね！？　どういうことか説明してもらおうじゃない！』

「い、いや！違うんだって！つい出来心で…」

『センパ～イ！　大丈夫ッスか～！？』

「バカ！今出てくんじゃねぇよ！」

英「エェ！？もう一人出てきた！？」

『何がどうなってるんスか～！？』

ミ『…　へぇ～～～…　…出来心でやってたワリには…　偉そうに

後輩までついてるんじゃない…？』

「…　…は、ははは…　…落ち着いて話、は…」

ミ『できるワケないでしょうが！』

英「…？　…あれ？　…　この人、前にどこかで会ったような…？」

「え！？　……　…あ！！」

英「あ！思い出した！」

ミ『何よ英子、コイツのこと知ってるの！？』

英「うん…。　こないだ合コンで…」

「ひえぇぇ！やめてくれ～！！」

ミ『　…　ご　う　こ　ん　？　…　』

『…せ、先輩…！　この人形さん、信じられない戦闘力ッス！』

「…お…　…終わった…」

ミ『…　ベッドの下に潜るのをやめたって、嘘をついていただけじゃなく…

アタシに隠れて合コンに行ってたなんてねぇ…

…覚悟はい～い？』

「……

…はい」

ミ『オモテ出なさい！たっっっっっぷり可愛がってあげるから！』

「痛っ！　ちょ、痛いってミカちゃん！耳引っ張んないで！」

ミ『つべこべ言わずにさっさと来るんだよっ！』

英「ちょっと、ミカ！？どこ行くのよ！？」

ミ『悪いけどちょぉ～っと出かけてくるわ！先に寝てていいからねっ！』

英「エェ！？ちょっと、ミカぁ～！」

『センパーーーーーイ！！！！！』

英「……」

『……』

英「…　あの」

『…　はい』

英「…　何で私ばっかりこんな目に遭うんでしょうか…？」

『……

…　三本足のミカちゃん人形、拾ったからじゃないッスか』

英「ああ、納得。　できるか！　もういいよ！」

第八説　ベッドの下の男（後書き）

はい、第八説「ベッドの下の男」です。
ま、分かると思いますけど、第七説「三本足のミカちゃん人形」とリンクした話になっています。こちらは、三本足のミカちゃん人形の少し後の話です。

書き始めた順としてはこっちの方が先で、書いてる途中に「三本足のミカちゃん人形と繋げられそうだな？」　って思いついて…。
で、先にミカちゃんのほうを書き上げて…　それからこっちの本文にいくつか伏線を張って…（A子と英子とか、風呂場の描写とかですね）　最終的にこういった形になりました。

初の試みだったので、うまくいったのかどうかは分かりません。
ただ、自分としては書いててとても楽しかったですね。

第九説　死ねばよかったのに

ねぇねぇ…　「死ねばよかったのに」って話…　知ってる？

あるカップルがね…　車で山道を走っていたの…

カーナビはね…　ずっと道なりって案内してて…

運転手の男の人は…　その通りに走っていたの…

そのままずっと走ってたんだけど…　突然大雨が降ってきて…

雷に驚いた男の人は…　驚いてブレーキを踏んだんだ…

そしたら車の前には崖が広がっていて…　その後カーナビから…

「死ねばよかったのに」って声が聞こえてきたんだって…

怖いよね…

●第九説　死ねばよかったのに

―　5キロ以上道なりです　―

「…　もうず～っと道なりに走ってるけど…　ホントに合ってんだろうな、このカーナビ？」

『大丈夫じゃないの？』

「…だってよぉ…」

『どのみち、あたしたちだけじゃ帰れないんだしさ。信じるしかないでしょ？』

「…　まあ、そうだな」

『ほらほら、ぼやいてないで頑張って！　ね？』

「はいはい…」

『ナビ子ちゃんも頑張ってね』

「カーナビに変な名前付けんなよ！」

…　…　…

―　5キロ以上道なりです　―

「…　おい…。　やっぱおかしくねえか、このカーナビ…」

『さっきからどうしたのよ？今日初めて使うわけじゃないんでしょ？』

「だってよ…　山を下る道を設定したはずなのに、全然山を下ってる感じがしねえんだよ…」

『…　言われてみればそうね…』

「…なぁ…　…カンで走っちゃダメかな…？」

『ダメよ！そんなことしたらますます迷っちゃうじゃない！』

「そ、そうかもしれねえけどよ…」

『大丈夫だって！いつかは下る道に入るんだよ、きっと！』

「…だといいけどな…」

『ナビ太郎君を信じましょ』

「ナビ子じゃねえのかよ！」

…　…　…

「うわっ！急に雨が降ってきやがった！」

『ねえ、大丈夫？前が全然見えないじゃない』

「…まあ、しっかり集中すりゃあ大丈夫だ…」

―　５キロ以上道なりです　―

「はいはい、分かったよ…」

ピシャアアァァン！！！！

「うわっ！」

『キャアァァ！』

「…　だ、大丈夫か？」

『ああ、何とかなぁ！』

「デスク○ムゾンのオープニングか！」

『首がムチウチになった程度』

「それは大丈夫って言わねえな！？」

『治療費５０万くらいで大丈夫だと思う』

「高っ！そういう意味で聞いたんじゃねえよ！」

「慌ててブレーキ踏んじまったけど…どっかイカれたりしてねえだろうな？　…ちょっと見てくるわ」

『え？まだ雨降ってるよ？』

「ちょっと見るだけだよ。お前はここで待ってろ」

『…　うん、分かった。私が今外に出たら透けブラしちゃうもんね』

「お前案外余裕だな！？」

「！！！！

…　が　…　…　崖…！？

…　もし、あのまま走り続けていたら…　…今頃…！！」

…　キャアアアァァァッ！　…

「！　おい、どうした！？」

『…　い、今…　…カーナビから…　男の声で…！
…　死ねばよかったのに　って…！』
「ッ！！！！」

―　冗談です　―
「…　…　は？」
『…え？』
―　笑ってくれると思ったのに　―
「笑えるわけねえだろ！こちとら死にかけたんだぞ！？」
『イヤッ！　声が、声が！』
「お、落ち着け！」
『私の中のナビ助の声とイメージ違う！』
「そっちかよ！アニメ放送一回目の原作ファンか！　しかも何回カーナビを改名させる気だ！？」
―　新しいルートを検索します　―

「な！？　この状況でまだ仕事を続けようとしている、だと！？」

―　検索終了しました。　とりあえずこの道を引き返してください　―

「引き返せってか！じゃあこれまでのお前の案内は何だったんだよ！」

『よし！　それじゃ張り切って引き返しましょ！』

「はぁ！？　普通この状況でカーナビの指示には従わねえだろ！」

『しょうがないじゃない！　多少無理矢理でも、カーナビの指示を聞く流れにしないと話が続かないんだから！』

「お前何言ってくれてんの！？　作者の構成力の無さを暴露するんじゃねえよ！」

「…　で、素直に従ってるっていうね…」

―　２００メートル先、右方向です　―

「大丈夫なのかコレ…」

『フンフフ～ン♪』

「…この状況で何でそんなに楽しそうなんだ…」

―　目的地周辺です　―

「は？　…何もねえじゃねえか…　ドコだよココ？」

―　こちらは夜景がきれいに見える場所です　―

「素敵なデートプラン提案しなくていいんだよ！」

『わぁ～キレイ～♪』

「楽しんでるし！」

―　キスしちゃえばいいのに　―

「余計なお世話だよ！そういうのいいからちゃんと案内しろ！」

―　１００メートル先、目的地周辺です　―

「…ずいぶん近いじゃねえか」

―　目的地周辺です。　こちらはカーセッ〇スの名所です　―

「何てトコに案内してくれてんだお前！？」

『ちょっと！何考えてんのよこのカーナビ！

今日はゴム持ってきてないんだからね！』

「ツッコむところはそこじゃねえ！」

―　いざという時のために、キチンと準備しておけばよかったのに　―

「さっきから何なんだよお前は！？」

『どうする？』

「意外とノリノリ！？　いや別にどうもしねえけど！？」

『…　いくじなし』

「常識人と言ってくれ！」

―　車の中ってのも意外といいものなのに　―

「知らねえよ！お前は経験済みなのかよ！」

『ちょっと！さっきから下ネタきついわよ！』

「そう言うお前のセリフが一番きつかったけど！？」

―　およそ3キロ先、左方向です　―

『…　ところで、まだ雨は降ってるのか？」

『ん？　私の答え方次第かな』

「…どういうことだよ？」

『元ネタの話では、その後雨がどうなったかっていう描写は無いんだよね』

「は？」

『だから、私が降ってるって言えば降ってることになるし、止んでるって言えば止むよ』

「いい加減すぎるだろ！」

『どっちがいい？』

「いや、そりゃ止んでるほうがいいけどよ！」

『そう。　じゃ、もう一回質問しなおして』

「何でだよ！」

『自然な流れで雨を止ませるためでしょ！』

「不自然極まりないだろうが！」

『大丈夫よ！不自然な部分は編集でカットするから！』

「カットしなかった結果こんな流れになってるんですけども！？」

『いいからやり直すのっ！』

「ああもう、分かったよ！」

―　およそ3キロ先、左方向です　―

「お前も参加するのかよ！」

―　さっきよりもだいぶ走ってるので、正確には3キロより短いです　―

「お前結構細かいな！？」

『ちょっと～、そういうアドリブやめてよ～』

「いいよもう！　で、まだ雨は降ってんのか！？」

『ううん、もう止んでるよ。　はい、これで止みました』

「ヒドイなコレ！こんな話で大丈夫なのかオイ！？」

『も～、心配しすぎだよ～』

―　所詮ギャグ小説だから、ある程度のおイタは許されるのに　―

「お前黙れ！あんまギャグをなめんじゃねーぞ！？」

『……』

「……」

『…　何もすることないね』

「…　山道だからな」

『どうするの？　このまま展開が何も無いなら強制終了させるけど？』

「強制終了って何！？」

『こうやるのよ。　もういいよ！』

「いやダメダメ！こんなんじゃ終わらせられないから！」

『え～？だって山道じゃ描写に限界があるよ～？』

「それ言っちゃダメじゃね！？」

―　新しい展開を検索します　―

「お前はお前で何やってんだ！？」

『ずいぶん気が利くね♪』

「喜んでんじゃねえよ！」

―　山道での展開が見つかりません。山を下ったところまで展開をカットするルートを推奨します　―

「とんでもねえこと言ったぞコイツ！？」

『じゃ、そういうことでお願いしま～す』

「それでいいのかよ！？　いくら何でも不自然すぎやしねえか！？」

『大丈夫よ。”…　…　…”　ってやっときゃそれっぽく表現できるから』

「”…　…　…”　を悪用するんじゃねえ！」

―　展開をカットします　―

「エェ！？　ちょっとマジかよオイ！？」

…　…　…

『は～、やっと山を下りられたね』

「ホントに下りちゃったよ！こんなことが許されていいのか！？」

―　作者が展開を思いつけばよかったのに　―

「余計なことは言わんでいい！」

「…　で、山道を下りたわけだけども…」

『じゃ、しばらくカーナビの案内通りに進みましょ』

「あ、まだ続けるんだ…」

―　５００メートル先、右方向です　―

「はいはい…」

―　目的地周辺です　―

「…何だここ…。　ただの道じゃねえか」

―　少女の霊が出るという小道です　―

「お前ふざけんなよ！　おいコイツやっぱ悪意があるぞ！」

『てことは、ここでは決して後ろをふり向いちゃダメなのよね？』

―　はい。魂があの世へ引っ張られますので　―

「それはジョ〇ョ第四部のネタだろ！むしろお前の魂を引っ張ってもらいたいわ！」

『見なきゃあいいんだろ？　あたしといっしょでよかったなカーナビくん』

「岸辺〇伴か！　お前スタ〇ド使いですらないだろーが！」

『ヘブ〇ズ・ドアーッ！！』

「やらんでいい！　いつまでジョ〇ョネタ引っ張る気だ！？」

―　作者がジョ〇ョ好きだから、もっとやりたかったのに　―

「別の機会にしてくれ！」

『だが断る』

「断るな！」

―　5キロ以上道なりです　―

「…　そういや、俺らはドコに向かえばいいんだ？」

『そうね～、じゃああたしの家に向かってもらえる？』

「そうだな、それが一番か」

『ねえ、何か音楽かけてくれない？』

「あ？　ああ、いいよ。何がいい？」

『吉〇三』

「そんなん持ってねえよ！」

『冗談よ』

―　テレビもねぇ！　ラジオもねぇ！　―

「お前が歌うのかよ！」

『オラこんな村いやだ～♪』

「ノリノリで歌ってんじゃねーか！　てかこれ著作権大丈夫！？」

―　心配ならばやらなきゃいいのに　―

「やかましいわ！」

『…　ねえ…　この道ってなんか不気味じゃない？』

「…　そうだな…」

―　ここは、追いかけババアが出るというウワサがある国道です　―

「ルート選択が悪すぎるだろ！お前いい加減にしろよ！？」

―　今回は私が主役だから、追いかけババアは出てこないのに　―

「主役のわりには一番セリフ少ないじゃねーか！」

『結局ほとんどあたしがボケてるしね』

「全くだよ！」

―　追いかけババアと同じような話にならないよう、色々気を遣ってるからなのに　―

『状況からして似てるからね～』

「そういうのは後書きで触れろや！」

「…　まだ着かねえのかよ」

『どうだろうね～。　ねえ、どう？』

―　作者のアイデアを検索します　―

「何をしてんだお前は！？　そんなもんお前に分かるのかよ！？」

―　作者のアイデアが見つかりませんでした　―

「分かっちゃったよ！お前一体何者だ！？」

『そろそろ限界ね。　じゃ、あたしの家までの展開カットで』

「またそれかよ！今回全体的に雑じゃね！？」

―　展開をカットします　―

「やんのかよ！作者楽してやがるなオイ！」

…　…　…

『ふぅ～、何とか家に帰れたよ～』

「…　もはやツッコむ気も失せるわ…」

―　ツッコむしか能が無いのに？　―

「ぶっ飛ばすぞ！」

―　目的地周辺です。音声案内を終了します　―

『じゃあ、あたしは帰るね』

「ああ。お疲れ」

『…　…ねえ』

「ん？」

『オチはどうするのかな？』

「何の心配をしてんだよ！」

―　オチを検索します　―

「やらんでいいわ！　てか音声案内終了したんじゃねえのかよ！」

―　オチが見つかりませんでした　―

「見つかんねえし！そこは見つけなきゃダメな場面だろ！」

『じゃ、ここはあなたがバシッと一発オトしてみて！』

「できるか！」

『…　役立たず』

―　死ねばいいのに　―

「うるせーな！　もういいよ！」

第九説　死ねばよかったのに（後書き）

はい、第九説『死ねばよかったのに』です。

この話は作中でも触れたように（笑）、追いかけババアの話と状況が似ているため、同じような話にならないように気をつけて書きました。

そのため、主役であるはずのカーナビのセリフが一番少なくなってしまったワケなんですが…　ま、これはこれでこの作品らしいっちゃらしいかな、と。

しかし…　改めて読むとなかなかにヒドいですねコレ（笑）ここまでメチャクチャにやったのは久しぶりな気がします。全体を通してとても楽しく書くことができました。

第十説　トイレの花子さん

ねぇねぇ…　「トイレの花子さん」って話…　知ってる？

花子さんはね…　３階の女子トイレ３つめの個室にいて…

扉を３回ノックした後…　「花子さんいらっしゃいますか」って呼びかけると…

「は～い」って返事を返してくるの…

そして扉が開いたら…　そこには赤いスカートにおかっぱ頭の女の子がいて…

そのままトイレに引きずり込まれちゃうんだって…

怖いよね…

●第十説　トイレの花子さん

A「ねえねえ、知ってる？」

B『何を？』

A「…ウチの高校の女子トイレね…　…トイレの花子さんが出るらしいよ」

B『うっそだぁ～！』

A「ホントだって！　先輩がこないだ会ったんだってさ！」

B『その人は今どうしてるのよ？』

A「え？　…　別に、普通にしてるわよ」

B『じゃあやっぱ嘘じゃん。花子さんに会ったら、そのままトイレに引きずり込まれちゃうんだよ？』

A「…　それがね…　…ウチの花子さんは、意外と話が分かる女の子なんだって」

B『…はぁ？　何それ』

A「とにかく！　先輩がそう言ってたんだもん！」

B『…嘘くさぁ～』

A「ホントなんだってばぁ～！」

…　…　…

…　こんにちは！　あたし、トイレの花子さん！　…

…　これをよんでるひとも、なまえくらいはきいたことあるでしょ？　…

…　あたしは、この”こうこう”のトイレでせいかつしてるんだ！　…

…　さあ！きょうもはりきっていくぞ！　お～！　…

…　…　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『ねえ、ちょっと助けてくれない？』

「？　どうしたの？」

『…　他の個室の紙が切れてて…　…花子さんの所の紙、余ってたらくれない？』

「……

べつのばしょのトイレじゃだめなの？」

『無理！間に合わない！』

「……

どうしても、かみがないとだめ？」

『当たり前よ！同じ女の子なんだから分かるでしょ！』

「……

…　はい、どうぞ」

『あ、ありがとう！　漏れる漏れる～！』

「…　ねえ、おねえちゃん」

『え？何？』

「…どうして、わざわざ花子をよんだの？」

『え？　だって開けるの怖いんだもん』

「さんかいこんこんしなければ、花子はでてこないよ？」

『あ、そうなんだ？　次からはそうするね』

「……」

…　…いまのおねえちゃん、いうほど花子をこわがってないきがするんだけど…　…

…　だめだめ！まだはじまったばかりだよ！　花子、がんば！　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『ちょっと聞いていい？』

「？　なあに？」

『その辺に百円落ちてない？』

「……

おちてないよ」

『ホントに？』

「ほんとだよ」

『…　花子さん…　…まさか、ガメてないわよね？』

「……

花子、いいこだからそんなことしないもん」

『ホントに？お姉ちゃんに嘘ついてない？』

「……

花子、おかねもってたってつかえないもん」

『あ、それもそうね。じゃあもういいわ』

「……」

…　…いまのおねえちゃん、ちょっとかんじわるい…　…

…　だめ！おちこんじゃだめだよ花子！がんばって！　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『ゴメンね、ちょっといいかな？』

「？　どうかしたの？」

『…いや…　…　実は、急にアレが来ちゃってさ…』

「……

あれ、じゃわかんない」

『…だからさ…　…女の子の日、ってヤツよ…』

「？　花子はまいにち、おんなのこだよ？」

『ああもう！そうじゃなくって！』

「……」

『…　生理用品　…　持ってないかな？』

「……

せいりようひん、って、なあに？」

『…そりゃ…　…生理の時に使うヤツよ…』

「……

せいり、って、なあに？」

『そ、そんなこと言わせないでよ！』

「おしえてくれないとわかんない」

『…だからさ…　…　女の子が、中学生くらいになると経験する…』

「……

…　花子、まだしょうがくせいだよ？」

『え！？そうなの！？』

「うん」

『ああもう！頼む相手間違えた！』

「……」

…　…いまのおねえちゃんのおはなし、むずかしくてよくわかんなかったな…　…

…　こんど、ちゃんと”おべんきょう”しよっと！　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『ちょっと頼みがあるの』

「？　うん、なあに？」

『私、落語研究会に入ってるんだけどね』

「……

それ、なあに？」

『部活動の一つよ。　でね…』

「うん」

『3年生が卒業したら、部員の数が足りなくなっちゃうのよ』

「…　うん」

『花子さん、よかったら入ってくれないかな？』

「……

花子、”らくご”わかんない」

『大丈夫大丈夫！初心者大歓迎だから！』

「……

花子、ここからでられないから、おねえちゃんといっしょに”らくご”できない」

『いいのいいの！とりあえず在籍だけしてくれればいいから！　正に幽霊部員。

…　ププッ！これ、イケるわ！』

「……」

『入部届け置いとくから！考えといて！』

「…　うん」

…　…おかしなおねえちゃん…。どうしてわらってたんだろ？　…

…　それに、おねえちゃん…。　花子、おなまえかくもの、もってないよ…　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『遊びましょ』

「いいよ！　なにしてあそぶ？」

『鬼ごっこ』

「……

花子、ここからでられないから、おにごっこできない」

『じゃあ、違うことして遊ぼうか』

「うん！　なにするの？」

『かくれんぼ』

「……

花子、ここからでられないから、かくれんぼもできない」

『それじゃ、これならどう？』

「うん」

『ドッジボール』

「……

花子、ここからでられないから…」

『アハハハ！超マジに答えてるし！ウケんだけど～！』

「……」

…　…いまのおねえちゃんは、ただのいたずらだよね…？　…

…　こんどきたら、トイレにひきずりこんでやるんだから！ぷんぷん！　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『…　ちょっと聞きたいことがあるんです…』

「？　なあに？」

『…　どうして、私には彼氏ができないんでしょうか…？』

「……

花子、むずかしいおはなしは、わかんない」

『…やっぱり女は顔なんでしょうか…？』

「……

花子、おねえちゃんのおかおがみえないから、なんともいえない」

『…そうですか…　…ありがとうございました』

「…　うん。さようなら」

『…　さようなら　…　私』

「え！？」

…　…なんだか、あるいみ花子よりこわいおねえちゃんがきちゃった…　…

…　もう！このくらいでくじけちゃだめ！　花子、まけないで！

…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『うほっ！　ホントにいたんだね花子たん！』

「え？」

『花子た～ん！ハフハフ！』

「……

おにいちゃん…　…ここ、おんなのこがはいるトイレだよ…？」

『ひゃ！お兄ちゃんだって！　もう一回呼んで～！』

「……

…　花子に、なにか、ごようですか？」

『ああ、うんうん！　花子たん！キミのパンツの色を教えてほしいな！』

「…　どうして？」

『いいじゃないかぁ～！　ねえ、教えてよぉ～！』

「……

じゃあ、みせてあげる」

『えぇっ！ホントに！？　うっひょ～っ！』

「とびらをあけて、はいってきて」

『やったぁ～！　それじゃ、おじゃまし ま～す！』

「……」

『…　アレ！？　…ひえええぇ～～～っ！！』

「……」

…　…へんなおにいちゃん…。　どうして”おぱんつ”のいろなんかしりたかったんだろ？　…

…　でも、ま、いっか！　きもちわるいから、トイレにひきずりこんでやったし！　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「は～い！」

『新聞部の者なんですが』

「？　はい？」

『今度、オカルト系の記事を書くことになりまして…。　よろしければ取材させてもらえませんかね？』

「……

花子、そういうのよくわかんない」

『大丈夫ですよ～。2、3簡単な質問をするだけですので』

「……

…　うん、いいよ」

『ありがとうございます～。
じゃ、一つ目の質問。　花子さんはやっぱりおかっぱ頭なんですか？』

「うん、そうだよ」

『他の髪型にしてみたい、とかはないんですか？』

「……

花子、かみのけのきりかた、わかんない」

『美容院に行ったりはしないんですか？』

「花子、ここからでられないもん」

『伸ばしたりとかは？』

「花子、かみ、のびないもん」

『色はやっぱり黒ですか？』

「うん」

『染めたりもしない？』

「……

そめる、って、なあに？」

『例えば茶髪ですとか』

「…　よくわかんない」

『なるほど、ありがとうございます。
次の質問。　花子さんの服装は赤いスカートですか？』

「うん、そうだよ」

『他の服を着たりはしないんですか？』

「……

花子、これしか”おようふく”もってない」

『流行を気にしたりとかは？』

「りゅうこう、ってなあに？」

『例えば、周りの女の子を見て研究したりとかは？』

「……

花子のまわりのおねえちゃん、みんなおんなじふく、きてるよ？」

『なるほど、確かにそうですね。
では、最後の質問。　ズバリ、花子さんは可愛いですか？』

「……

花子、じぶんのおかお、みたことない」

『すぐそこに鏡がありますが？』

「花子、かがみにうつらないもん」

『なるほど、ありがとうございました。
では最後に、花子さんの写真を一枚撮らせてもらえないでしょうか？』

「……

とびらがしまってたら”おしゃしん”はとれないよ？」

『あ、じゃあ開けていただいていいですかね？』

「……

あけたら、花子、おにいちゃんをトイレにひきずりこんじゃうよ？」

『あ、じゃあ結構です』

「……」

…　…花子、じつはあんまりゆうめいじゃないのかな…？　…

…　ううん、そんなことない！　じしんをもつのよ、花子！　…

…　…もう、すっかりくらくなっちゃった…　…

…　きょうはもう、だれもこないよね。　花子もおやすみしよっと　…

コンコンコン…

「（？　…だれ？）」

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「…　は～い！」

『夜分恐れ入ります。　隣の男子トイレの”赤マント”でございます』

「あ…　こんばんは」

『はい、こんばんは』

「こんなおそくに、なにかごようですか？」

『いえいえ、大した用事ではないのですがね…

聞くところによりますと花子さん、お洋服が一着しかない、とのことなので…』

「え？」

…　…　…

コンコンコン…

『花子さん、いらっしゃいますか？』

「だれ？」

『…？　…先日の新聞部の者です。　花子さんの特集がとても評判よかったものですから、そのお礼に…』

「…ああ…　あのガセネタきじね…」

『え！？』

「だってそうでしょ？　なにひとつただしいことをかいてないんだから」

『いや、だってあれは花子さんが…』

「花子のせいにするき！？」

『…　でも、花子さんの髪型は…』

「がっつりパーマがかかった、まっきんきんのドはでヘアーよ」

『はい！？　…じゃ、じゃあ花子さんの服装は…』

「ざっくりスリットがはいった、おいろけムンムンのセクシードレスよ」

『エェ！？　…　なら、花子さんの顔は…』

「しょようじかんがにじかんの、げきもりギンギラパラダイスメイ

クよ」

『何おかしな方向にデビューしちゃってんですか！？』

「しょうがないじゃない！いまどき、じみなかっこじゃゆうめいになれないのよ！」

『そんなことないですって！十分有名じゃないですか！』

「うそばっかり！」

『一体何があったんですか！？』

「あんたたちにんげんになめられるのは、もううんざりなのよ！」

『どういうこと！？』

「あんただってどうせ、わたしのことこわくもなんともないんでしょ！？」

『花子さんの場合、カッコ変えたって怖くなりませんが！？』

「うるさいわね！もうかえってよ！」

『花子さん！』

「これいじょう、あたしをこまらせないで！」

『待ってくれ、花子さん！』

「…　さよならっ！」

『花子さーーーん！！

って何だこの茶番！　もういいよ！』

第十説　トイレの花子さん（後書き）

はいどうも。記念すべき第十説の主役は、超メジャーな「トイレの花子さん」にやってもらいました。

今回、全体的にほのぼのした感じになっちゃいましたね。花子さんを少女に設定したため、キツめのツッコミを花子さんにさせられなくなっちゃいまして…。

こんなんで大丈夫かな、とも思ったんですが、いつもいつもバカ騒ぎばっかりでも飽きられてしまうんじゃねーか、ってことでこのまま押し通しました。

オチも苦労したんですが、同じトイレネタの赤マントを登場させたらサクサク書くことができました。面白いかどうかは別問題として（笑）

ところで…　読みにくくなかったですか？　花子さんが少女であることを強調するため、花子さんのセリフをほぼ全部ひらがなで書いたので…。

仮に読みにくくても、「だが、それが良い！」ぐらいの広い心でお願いします（笑）

作者の予想した以上に、このシリーズ長く続いております（途中長期に渡って活動休止してましたが）。　これも、こんな下らない話を読んでくださっている皆様のおかげでございます。

今後も応援、よろしくお願いします。今回も読んでいただき、ありがとうございました。

若干最終回っぽい雰囲気になってしまいましたが、まだ続きますよ～（笑）

番外編　都市変説妖怪定例会議（前書き）

今回の話は、いつもの倍以上の長さがある大長編になっております。十分な時間を確保した上でお読みください。

番外編　都市変説妖怪定例会議

ねぇねぇ…　「都市変説妖怪定例会議」って話…　知ってる？

都市変説妖怪定例会議はね…　都市変説の十説突破を記念した番外編で…

作中に登場した妖怪が集まって…　会議をするって話なんだけど…

番外編だからってことで…　作者が好き勝手やっちゃって…

まとまりがない上に…　ものすごく長い…

メチャクチャな話になってるんだって…

怖いよね…

●番外編　都市変説妖怪定例会議

裂「皆さん、こんばんは。都市変説妖怪定例会議の時間がやってまいりました。
進行役は私、口裂け女が勤めさせていただきます。どうぞよろしく」

下「アシスタントの、ベッドの下の男（新入り）ッス！よろしくッス！」

裂「よろしく。　あなたは、先輩の代役で急遽呼ばれたのよね？」

下「そうッス。先輩が怪我で入院してしまったんで…」

裂「そうらしいわね。確か全治3ヶ月とか…」

ミ「5ヶ月よ」

裂「？　そうなの？　…ミカちゃん、詳しいわね？」

ミ「…　そりゃ詳しいわよ。…ウフフフ…」

裂「…　ミカちゃん、まさか…」

下「…（　ヒソヒソ…　…その、まさかッス…）」

裂「…　そう…。　あの人も、いい加減にすればいいのに…」

裂「ではまず、出席の確認を取らせてもらうわね。
まず始めは　…　メリーさん」
下「…メリーさんは、まだ来てないッス」
裂「…　一人目から遅刻とか、勘弁してほしいわ…」
プルルル…　プルルル…
下「あ、電話ッス」
裂「多分メリーさんね。　私が出るわ」
ピッ
裂「はい」
メ「こんばんは、私メリーさん」
裂「でしょうね。　…　今日は皆で集まるって言ったわよね？今どこにいるの？」
メ「今駅を出たところなの」
裂「全然進んでないじゃない！何やってるのよ！」
メ「道が分からなくなっちゃったの」

裂「学習しないわねアンタ！？アンタが登場してからどんだけ時間経ったと思ってんの！？」

メ「よかったら、迎えに来てほしいの」

裂「行けるか！口裂け女とメリーさんが並んで歩くとかどんな絵ヅラよ！？」

メ「じゃあ、何か目印になるものを教えてほしいの」

裂「そんな目立つ場所でやってるワケないでしょ！」

メ「…　あれもダメ、これもダメ。　私は一体どうすればいいの？」

裂「知らないわよ！　とにかく！もう始まってるから早く来なさいよ！」

ガチャリ　ツーツーツー…

下「…　お疲れ様ッス…」

裂「ハァッ、ハァッ…　っ　…とりあえず、先に進みましょう…」

裂「…じゃあ、二人目ね。

二人目は　…　口裂け女。　は、当然参加してる…　と」

下「ちょっといいッスか？」

裂「？　何？」

下「木更津のほうの口裂け女さんじゃないッスよね？」

裂「だから木更津バージョンは無いって言ってんでしょうが！　てかアンタまでボケんじゃないわよ！」

下「す、すいませんッス！」

裂「じゃ、三人目いくわよ。

三人目は　…　コックリさんね」

下「コックリさんは、こっちから呼び出さないと来ないッスよ」

裂「そうね。　というわけで、すでに準備はしてあるわ」

下「準備がいいッスね～」

裂「こういうのはテンポが大事だから。　じゃ、さっそく始めるわよ」

下「了解ッス」

裂「コックリさん、コックリさん、おいでください」
下「コックリさん、コックリさん、おいでください」

コ…よばれてとびでてジャジャジャジャ
ジャ〜ン！…

裂「ハク○ョン大魔王か！」

下「…今日も絶好調みたいッスね…」

裂「迷惑なことにね…」

コ…やあ、くちさけおんなちゃん。
またあったね…

裂「一度も会ったことないでしょ！」

コ…やだなあ。きのうぼくのゆめの
なかであったじゃないか…

裂「何勝手に出演させてんのよ！」

コ…ゆめのなかで、ぼくときみがど
んなことをしていたか、しりたい

かい？…

裂「知りたくないわよ！どうせロクなことしてないんでしょ！」

コ…ぼくはあのゆめをみていらい、そのゆめのなかでのできごとをおもいだしながら、よなよな…

裂「やめなさい！　アンタ結婚してるんだから、いい加減落ち着きなさいよ！」

コ…いっけねかっこわらい…

裂「次そんなセクハラ発言したら、けいこさんに言いつけるからね！」

コ…そ、それだけはかんべんして！…

裂「だったら、少しはマジメにやんなさい！分かった！？」

コ…は～い…

裂「良し！」

下「…だいぶヒドイッスね、この人…」

裂「…作者も認める、都市変説史上最低のキャラだからね…」

裂「じゃ、次。

四人目は　…　追いかけババア」

婆「こりゃ！年寄りに向かってババアとはなんじゃ！」

裂「そういう名前なんだから仕方ないでしょうが！」

婆「最高でお婆ちゃん、最低でもお婆ちゃんと呼びんしゃい！」

裂「谷〇子か！」

下「ちょっといいッスか」

裂「何よ！」

下「そのセリフを言った時は、まだ田村〇子ッス」

裂「ソコどっちでもいいでしょ！」

婆「アンタ、腕あるのう」

下「恐縮ッス」

裂「認めなくていいから！」

裂「…　…長い…」

下「出席確認程度にどんだけ時間かかるんスか…」

裂「全員いちいちボケるから、全っ然先に進まないわ…」

下「…頑張りましょうッス」

裂「…　そうね。　…じゃあ次。

五人目は　…　人面犬」

犬「ここにいる」

裂「はい、出席…　と」

犬「ところで君」

裂「？　何？」

犬「私のことを”匹”と数えなかったな。いい心がけだ」

裂「相変わらずの上目線！？」

犬「だが、まだ足りないな」

裂「は！？」

犬「↑ここも”犬”じゃなくて”人”にしてもらわねば」

裂「そんなダメ出しいらないわよ！」

人「というわけで、変えさせてもらうぞ」

裂「勝手なことするんじゃないわよ！あああもう分かりづらいっ！」

人「そんなにカリカリするんじゃない。老けるぞ？」

裂「アンタのせいでしょうが！　だいたい、アンタは人の顔をした犬なんだから、結局のところ犬なのよ！」

人「そんなに犬犬言うことないだろう！　この、アバズレめが！！」

裂「誰がアバズレよ！いい加減にしないと殺すわよ！？」

人「な！？　…さては貴様、珍獣ハンターだな！？」

裂「いちいちやかましいわね！　ホラ、戻すわよ！」

犬「くっ！何てことだ…！」

裂「ああ～！疲れるわね、もう！」

下「登場する妖怪のほとんどがボケキャラッスからね…」

裂「作者に言って、ツッコミキャラを追加してもらうことにするわ！」

下「それがいいッス」

裂「次っ！

六人目は　…　怪人赤マント」

赤「はい、ここに」

裂「うん、出席ね」

赤「よろしくどうぞ」

裂「……」

下「……」

裂「…　ボケないのかしら…」

下「…　赤マントさんは、そこまでハードなボケキャラじゃないッスからね…」

裂「…　大丈夫よね？　…何か振ったりしたほうがいいと思う？」

下「…　どうッスかね…。　服の話をすれば食いつくとは思うッスけど…」

赤「…あの～」

裂「…え！？　…　な、何か？」

赤「何でしたら、ボケさせていただきますが？」

裂「い、いえいえ！そんな気を遣っていただかなくても大丈夫よ！」

赤「左様でございますか」

裂「ええ！」

裂「…　これはこれで、やりにくいわね…」

下「…うまいことといかないッスね…」

裂「…まあいいわ。次。

七人目は　…　三本足のミカちゃん人形ね」

ミ「はい、ここにいるわよ」

裂「そうね。最初からいたものね」

ミ「あ～、やっと私の順番になったわ～。　もう、みんな喋りすぎなのよ～」

裂「ごめんなさいね。どいつもこいつも目立ちたがり屋で」

ミ「別にアンタが謝ることないわよ」

裂「ありがとう。そう言ってくれると助かるわ」

ミ「ねえ、ところでさ」

裂「何？」

ミ「この会議って、あとどれくらいかかるわけ？」

裂「そうねぇ…。　出席の確認が終わったら各々活動報告をして、それから今後の活動予定を話し合うから…　…もうしばらくかかるかしら」

ミ「あっちゃ～…　そんなにかかるの？」

裂「何か問題でもあるの？」

ミ「いや…　…英子がまた合コン行くらしいから、ついてかないといけないのよ」

裂「…英子ってこないだ言ってた、あなたが今いる家の？」

ミ「そう」

裂「…　その子、どんだけ合コンすれば気が済むわけ？」

ミ「さあ？　あれで結構理想が高いのよね～」

裂「そうなんでしょうね～」

ミ「程よい所で妥協しなさい　って、いつも言ってるんだけどね～」

裂「少しは自分の歳考えなきゃね～」

ミ「そうなのよ～。付き合わされるほうも大変よ～」

裂「気の毒だわ～」

ミ「寝るのも遅くなっちゃうから、おハダも荒れるしさぁ～」

裂「あ～、分かるわ～。アタシも最近ヒドイのよ～」

ミ「えぇ～？　サケちゃん、ハダ超キレイじゃ～ん」

裂「そんなことないわよ～。マスクしてるからいいようなものの、近くで見ると結構キてるのよ～」

下「…　…あ、あのぉ～…」

裂「何？」

ミ「何？」

下「…　お二人は、知り合いか何かで…？」

ミ「まあね」

裂「プライベートでも仲良くさせてもらってるわ」

ミ「都市変説のダブル美人といえば、アタシ達のことよ」

裂「まあ、当然アタシのほうが上だけどね」

ミ「お、サケちゃん言うね～」

下「…サケちゃん…？」

ミ「そうよ。口裂け女だから、サケちゃん」

下「…　そうッスか…」

ミ「あ、ところでサケちゃん…」

裂「なになに？」

下「…　あの、口裂け女さん…」

裂「何よ？」

下「…キャラ変わってるッス…」

裂「女友達と話してる時に、キャラなんか気にしてられないわよ」

下「…　今、一応本番中なんスけど…」

ミ「アンタ常識人ね～。ウチのバカ彼氏とは大違いだわ～。
…　乗り換えちゃおうかしら！？」

下「…どうもッス…。　…とりあえず、このままじゃ先に進まないッスから…」

裂「え？　…ああ！そうだったわ！すっかり忘れてた！」

ミ「まあ、しょうがないわね」

裂「ごめんね、ミカちゃん。また後でメールするから」

ミ「うん、待ってる♪」

下「どんだけ仲いいんスかアンタら！？」

裂「…　コホン。　…気を取り直して…。

八人目は　…　ベッドの下の男」

下「はい、自分ッス」

裂「はい、出席ね。じゃあ次」

下「エェ！？　ちょ、ちょっと待ってくださいッス！」

裂「何よ？」

下「いや…　…自分も何か喋りたいんスけど…」

裂「何言ってるのよ。本編でツッコミキャラだったアンタがボケられるとでも？」

下「いや、だとしてももうちょっと…」

裂「さっきのミカちゃんとの絡みで時間くっちゃったから、アンタに使う時間は無いのよ！」

下「それは自分の責任じゃないんスけど！？」

裂「はい、一回ツッコんだわね。　じゃあ次」

下「エェ！？　そんな、あんまりッス～～～！！」

裂「さあ、もうそろそろ終わるわね。

九人目は　…　死ねばよかったのに　…の、カーナビ」

下「……」

裂「ちょっと！やる気出しなさいよ！」

下「…　了解ッス…」

裂「まったく…　もう一回いくわよ？

九人目は　…　死ねばよかったのに　…の、カーナビ」

下「もはや生物ですらないッスね…」

裂「で、そのカーナビは今どこにあるわけ？」

下「車と一緒にここまで運んでる最中ッス」

裂「…段取りが悪いわね～」

下「持ち主との出演交渉に、思いのほか手こずったらしいッス」

裂「どうすんのよ？来るまで待ってらんないわよ？」

下「…　そのカーナビが言うには…　”展開カット”って技を使うと、途中の展開を飛ばせるらしいッス」

裂「何よそれ！？そんなふざけた技がまかり通ったの！？」

下「…みたいッス」

裂「…信じらんない…」

下「…　で、どうするッスか？」

裂「…　待ってるだけ時間の無駄だしね…。　…しょうがない、その技を使いましょ」

下「了解ッス。　…じゃ、お願いしま～す」

…　…　…

下「…　はい、というわけで到着したッス」

裂「ホントにできちゃうの！？　これはいくらなんでもヒドすぎるんじゃない！？」

下「…まあ、こうして思いがけず役に立ったわけッスから…」

裂「…　あ、頭痛くなってきたわ…」

裂「…　さあ、いよいよ最後ね。

十人目は　…　トイレの花子さん」

花「は～い！」

裂「あら？　あなた、トイレから出られたの？」

花「うん。こんかいは”ばんがいへん”だから、おそとにでてもいいんだって」

裂「そう、よかったわね」

花「うん！」

裂「…　ねえ、ひとつ聞いてもいいかしら？」

花「なあに？」

裂「…　あなたのキャラ、元に戻ってない？」

花「……

　あれは、あくまで”おち”ようのきゃらだから、こんかいはもとにもどしたんだって」

裂「…　それ、誰が言ってたの？」

花「さくしゃさん」

裂「…　ホント、適当なんだから…」

裂「さあ、ようやく出席の確認が終わったわ！」

下「長かったッスね～」

裂「長さ的にはもう十分な気もするけど…　このまま終わったら会議じゃなくなっちゃうからね」

下「そうッスね」

裂「というわけで…　各自、活動報告をしてちょうだい。

まずは、メリーさん！　…は、まだ来てないのね…」

プルルル…　プルルル…

下「電話ッス」

裂「メリーさんね。随分タイミングがよろしいこと…」

ピッ

裂「はい」

メ「私メリーさん」

裂「分かってるわよ。　で、今どこ？」

メ「今、あなたの後ろにいるの」

裂「！　うぉうっ！　いつの間にっ！？」

メ「あなたたちがダラダラやってくれたおかげで、何とか間に合ったの」

裂「ダラダラとか言うんじゃないわよ！間に合ってもいないし！

…　まあいいわ。　じゃ、メリーさん。活動報告をしてちょうだい」

メ「私は、これまで１０人の人間と関わったの」

裂「あら、意外と精力的に活動してるのね」
メ「うち8人は、途中で挫折したの」
裂「打率2割!?一体何があったのよ!?」
メ「途中で道が分からなくなっちゃって…」
裂「アンタどんだけ方向オンチ!?」
メ「残り二人のうち、一人は本気で好きになっちゃって…　…手が出せなかったの…」
裂「2割下回った!　え!?ちょっとアンタ、マジで何やってんの!?」
メ「仕方ないじゃないの!　…後ろを振り返った時の表情が、すごくカッコよかったんだもの…」
裂「妖怪のくせに、人間相手に恋なんかしてんじゃないわよ!」
メ「…他人を妖怪呼ばわりは、いくらなんでも失礼だと思うの」
裂「うっさいわね!」
メ「自分だって、道行く男に”私キレイ?”って聞いて回る痴女じゃないの」
裂「誰が痴女ですって!?　アタシはそういう役回りなんだから仕

方ないでしょうが！」

メ「ちょっとばかり美人だからって、調子に乗ってんじゃないの？」

裂「アンタそんな嫌な性格だったっけ！？」

メ「これ以上話すことは何もないの」

裂「ああそう！じゃあもういいわよっ！」

裂「…　一人目からコレじゃ、先が思いやられるわ…」

下「…ドンマイッス」

裂「…　じゃあ、次はコックリさんね」

コ…　…　Ｚ　Ｚ　Ｚ　…　…

裂「ちょっと！何寝てんのよ！」

コ…　…　あ　あ　、　わ　る　い　わ　る　い　！　あ　ん　ま　り　た　い　く　つ　だ　っ　た　も　ん　で　、　つ　い　…

裂「まったく！　さっさと活動報告してちょうだい！」

コ…　…　さ　い　き　ん　は　、　オ　ジ　サ　ン　を　よ　び

だしてくれるこがすくなくってね。あんまりかつどうできてないんだょ…

裂「…ま、今時コックリさんってのも流行らないしね」

下「学校側の規制も厳しいッスしね」

裂「おまけに、呼び出したのがこんなエロオヤジじゃ、そりゃ廃れるってものよね」

コ…たまによびだされても、さえないだんしがくせいばっかりでさぁ〜…

裂「…は？」

コ…そういうときは、なんやかんやりゆうをつけてかえらせてもらってるからね…

裂「全然やる気無いじゃないの！理由って何よ！？」

コ…コレがコレなんで、とか…

裂「飲み会を途中で抜け出すサラリーマンか！」

コ…しゅうでんなくなっちゃうから、とか…

裂「合コンを早めに切り上げたいＯＬか！」

コ…　きょうはよめのたんじょうびなんだ、とか…

裂「愛人の家から帰る社長か！」

コ…　くちさけおんなちゃん、ツッコミのうであがったねえ…

裂「何よ急に！」

コ…　ひたすらツッコんでいるだけにみえるけど、ぜんぶかいしゃのやくしょくにたとえてツッコんでいる。さすがだょ…

裂「じっくり味わわないでよ！恥ずかしいじゃない！」

コ…　はずかしがっているかおもかわいいね…

裂「気持ち悪っ！もういいから黙って！」

裂「次は…　追いかけババアよ」

婆「わしゃ、歳のせいか最近コシが痛くてのぉ…」

下「そりゃ大変ッスね」

婆「じゃから、動きに往年のキレが無くなってきとるんじゃよ」

裂「…そんなんで活動できるの？」

婆「なんで今、ジムで鍛え直してるとこじゃわい」

裂「ジムとか行ってんの！？」

婆「おかげで、最高時速１１０キロまで落ちたスピードを、１３０キロまで戻せたわい」

裂「十分速いじゃない！」

婆「ピーク時は１５０も平気で出せたんじゃがの」

下「…正に化け物ッスね…」

婆「しかも、そのジムのインストラクターがイケメンでのぉ～」

裂「は！？」

婆「このババアも、久しぶりに血がたぎってきよるんじゃよ！」

裂「何なのよ、どいつもこいつも！」

婆「今は、どうやってヤツのメルアドを聞き出そうか思案中じゃわい」

裂「アンタまで色ボケなの！？少しは自分の歳考えなさいよ！」

婆「何を言いよるか！女はいくつになっても女なんじゃぞ！」

裂「やかましいわね！」

婆「おヌシだって今は若いが、いつかはワシのようなババアになるんじゃからな！」

裂「アタシは妖怪だから歳取らないわよ！バーカ！」

下「ちょっと、二人とも落ち着いてくださいッス！」

婆「おヌシは黙っとれ！」

裂「アンタは黙ってなさいよ！」

下「エェ！？何で自分が怒られるんスか！？」

裂「…　さ、落ち着いて先に進みましょ」

下「…　はいッス」

裂「次は、人面犬ね」

犬「…　悪いが、私はほとんど活動できていない」

裂「どうして？」

犬「…最近、ハンター共の追跡が厳しくてな…。　昔のように気楽に動けなくなってしまったのだ」

下「…まあ、仕方ないッスね」

犬「だが、何もしていないわけではないぞ」

裂「？　というと？」

犬「いつハンターに遭遇しても大丈夫なよう、新しい必殺技の修行をしている」

裂「必殺技！？」

犬「そうだ。　聞きたいか？」

裂「…　何となく、嫌な予感がするんだけど…」

下「…　聞かせてくださいッス」

犬「そうか。　まずは、肉球から気の波動を撃ち出す必殺技で…」

裂「…　…それは、何か掛け声はある？」

犬「あるぞ。　…か～…　…め～…」

裂「やっぱりね！　もうこれ以上はいいわ！」

犬「他にもあるぞ？　自分の身体の一部を巨大化させてだな…」

下「…その必殺技の名前は何スか？」

犬「ゴムゴムの…」

下「はい、もういいッス！」

犬「そうそう、こないだ時間を5秒ほど止める技も使えるようになって…」

裂「どんだけ必殺技覚えてんのよ！アンタ何者！？」

下「…で、その必殺技は…？」

犬「うむ、世〇（ザ・ワー〇ド）という…」

裂「ついにジョ〇ョネタ来ちゃった！」

下「ジョ〇ョファンに怒られるッス！」

犬「他には…」

裂「やめなさい！これ以上喋ったらいよいよ著作権に引っかかるから！」

裂「次っ！　次は、怪人赤マント！」

赤「はい。　私は、８枚のマントをお客様に販売いたしました」

裂「…やっとまともに活動してるヤツがきたわね…」

下「内訳はどういった感じッスか？」

赤「オレンジが４点、虎柄が２点、ストライプ柄が１点、黄色が１点、でございます」

裂「…オレンジがずいぶん売れたのね？」

赤「はい。オレンジはリアル評価が上々だったもので」

下「…リアル評価？」

赤「作者の友人の評判が良かったそうでございます」

裂「どんな裏事情！？」

下「…　ところで、黄色は聞いたことないんスけど…　どんなものなんスか？」

赤「はい。　こちらは、まずお客様に死んでいただきまして…」

裂「ふむふむ」

赤「その後、私のショ〇ベンで死体を黄色く染めるのです」

裂「汚っ！」

下「よくそんなのが売れたッスね！？」

赤「あまりに下品なので、本編ではボツにしたネタだそうです」

裂「で、何でそれを今出すワケ！？」

赤「番外編ですから」

裂「番外編だからって、何でもアリってわけじゃないのよ！」

裂「じゃ、次はミカちゃんの番よ」

ミ「私は、さっき言ったとおりよ」

裂「英子って子の家にいるのよね？」

ミ「そ」

裂「じゃあ、特に活動という活動はしてないのね？」

ミ「そうね～。　不幸にするったって、そもそもあの子そこまで幸せでもないし…」

裂「…それも悲しいわね…」

ミ「お風呂とかも使わせてもらってるし…　普通に仲良くなっちゃったし…　オッパイの触り心地いいし…」

裂「何してるのよミカちゃん！？」

コ…　ええ！？　オッパイ！？　…

裂「出てこなくていいのよオッサン！」

コ…　うほっ！　こんど、ぜひよびだしてほしいな！　…

裂「ちょっと！いい加減にしなさいよ！」

ミ「…　…ねえ、アンタ…」

コ…　？　何だい？　…

ミ「…今は、アタシの出番よね…？」

コ…　…え？　…

ミ「あんまり出しゃばったマネすると…

…殺すわよ？」

コ…　…す、すいません　でしたぁ～！

…

下「…　…ミカさん、さすがッス…」

裂「じゃあ、次は…　ベッドの下の男、アンタよ」

下「自分は新入りなんで、報告するほどの活動はまだ何もしてないッス」

裂「あら、そうなの？　…困ったわね…」

下「先輩のケータイ番号知ってるッスから、電話してみるッスか？」

裂「病院で電話はマズイんじゃないの？」

下「…そうッスけど…　この際しょうがないッス」

裂「…まあ、そうね。　読者の皆さんはマネしちゃダメよ」

…　…　…

ピリリリリ…　ピリリリリ…

ピッ

男「はい、どちらさん？」

裂「もしもし、アタシよ」

男「ああ、口裂け女ちゃんか」

裂「そうよ。入院中なのに電話して悪いわね」
男「いいってことよ。　こっちこそ悪いね、せっかくの集まりなのに参加できなくて」
裂「気にしないで。　…で、悪いんだけど、活動報告をしてもらってもいいかしら？」
男「ああ。　…つっても、特に報告するほどのことはねぇぞ？」
裂「あら、そうなの」
男「おう」
裂「病院のベッドの下には潜らないの？」
男「…　足の骨、両方折れちまってるからな。動けねぇのよ」
裂「あらまあ、大変ね」
男「そうなんだよ…」
裂「でも、ちょっと嬉しいんじゃないの？」
男「あ？」
裂「病院のナースさん、好きなだけ見られるじゃない」
男「ああ！そうなんだよ！　いやぁ～、やっぱナースはいいよなぁ

～！」

裂「そうなの？」

男「おうよ！　ミカちゃんもいないから、好きなだけ見られるしなぁ」

「…　それで？」

男「こないだなんか、チラっとパンツも見えたしよ！　今後は病院のベッドを中心に活動してこうかなぁ！？　ガハハハハ！」

「……　ふ～～～～～ん……」

男「？　口裂け女ちゃん？」

ミ「…　違うわよ…」

男「！！！！　ゲェッ！？　み、ミカちゃん！？」

ミ「ウフフフフ…　…せいか～い…」

男「…　あ、あ、あの…　…　ど、どっから聞いてた　…かな？」

ミ「そうねぇ～…　ミカちゃんがいないから、好きなだけナースを見られる　…　って辺りからよぉ～…」

男「…　いや、あ…　…あれは、ほんの冗談で…」

ミ「ウフフフフフ…

…　ねえ…　…何ヶ月がい～い？」

男「え！？　…　な…　…何が、でしょうか…？」

ミ「入院期間よぉ～…。　…何ヶ月延ばしてほしい？」

男「い、い、い、い、いや…　…それは…」

ミ「…会議が終わったら、お見舞いに行くから…

待　っ　て　て　ね　？　」

男「……

…　はい」

ガチャリ　ツーツーツー…

ミ「…ありがとぉ～…。　…ウフフフフフフ…」

裂「…ミカちゃん…　とてつもない戦闘力だわ…！」

下「…先輩…　ご愁傷様ッス…」

裂「じゃあ、次はそこのカーナビの番ね」

カー　活動履歴をロードします　―

下「そういえば、カーナビさんはこれが今回初ゼリフッスね」

裂「そう言えばそうね」

カー　3件見つかりました　―

裂「…それほど多くはないわね」

下「詳しい説明をお願いするッス」

カー　1件目…　カップルを、山道から彼女の家まで案内しました
―

裂「要するに本編ね」

下「次お願いするッス」

カー　2件目…　大怪我を負った男性を、病院まで搬送しました　―

裂「…大怪我を負った男性…？」

下「…　先輩のことッス…」

裂「この車で運んだの！？」

カー　彼女を怒らせなけりゃよかったのに　―

裂「アンタ、あの段階ではまだ登場すらしてないじゃない！」

カー　番外編ですから　―

裂「何でもかんでも番外編で片付けるな！」

下「まあまあ…。　…じゃ、ラストお願いするッス」

カー　3件目…　メリーさんを集合場所まで乗せました　―

裂「メリー！アンタ何やってんのよ！？」

メ「おかげで助かったの」

裂「生意気に楽してんじゃないわよ！」

メ「何事も有効活用しないともったいないの」

裂「やかましいわ！」

下「…じゃあ結局、ほとんど身内相手にしか活動してないんスね…」

カー　車じゃなければ、もっと色々活動できたのに　―

裂「もういいわ！次っ！」

裂「じゃ、最後は花子さんね」

花「は～い。　花子はトイレで、いろんなおはなしをきいたよ」

裂「…　あのね、花子さん」

花「なあに？」

裂「あなたの役目は、人間をトイレに引きずり込むことなのよ」

花「……

…　だって…」

裂「私達は、人間から怖がられる存在でないといけないの」

花「……」

裂「人間の話を聞くだけじゃダメなのよ。分かるよね？」

花「うるっさいわね！」

裂「エェ！？」

花「こまかいことで、やいやいやかましいのよ！」

裂「いや、別に細かくは…」

花「なんで花子ばっかりおこられなくちゃいけないのよ！　どいつもこいつも、ろくなかつどうをしてないくせに！」

裂「分かった！私が悪かったわ！」

花「だいたい、こわがられるそんざいってなによ！？　まいかいまいかい、くっだらないはなしばっかりじゃないの！」

下「花子さん、それは言いすぎッス！」

花「あんたはだまってなさいよ！トイレにひきずりこんでやりましょうか！？」

下「ひえぇぇ！」

裂「花子さん！　キャラ！キャラ変わってる！」

花「…はっ！？

……　…　てへっ♪」

裂「…　はい、ＯＫで～す…」

下「…　花子さん…　…ＯＫだそうッス…」

花「は～い！」

裂「…やれやれだわ…」

裂「よし！これで活動報告も終わったわね！」

下「…　今回、やたら長くないッスか…？」

裂「…登場人物が多すぎるのよね～…」

下「…まだ続けるんスか？」

裂「最後に、今後の活動予定を発表して終わりよ」

下「じゃあ、ようやく終わるんスね」

裂「そうよ。　いい加減長いから、こっからはサクサク行くわよ！」

下「了解ッス！」

裂「テンポ良くね！　まずはメリーさんから、始めっ！」

メ「私は、とりあえずＧＰＳ機能付きのケータイを…」

裂「少しは自分で努力しなさい！　次っ！」

コ…　オジサンは、こんどえいこちゃんのおへやにおじゃましますー

裂「よし決めた！けいこさんに言いつける！　次っ！」

婆「わしゃ、あのイケメンインストラクターとデートがしたいのぉ～」

裂「それは単なる願望でしょうが！　次っ！」

犬「私は、止められる時間を最大９秒に…」

裂「ジョ〇フの血でも吸ってなさい！　次っ！」

赤「私は、このまま売り上げを伸ばして、ゆくゆくは本社勤務に…」

裂「まず売り上げを伸ばす方法を考えなさい！　次っ！」

ミ「…病院であのバカを可愛がるのよ…」

裂「殺さない程度にね！　次っ！」

下「あ、自分は…」

裂「アンタはいい！　次っ！」

下「エェ！？また！？」

カ―　今後の予定を検索します　―

裂「テンポが悪い！　次っ！」

花「花子、いままでどおりじゃだめ？」

裂「ＯＫ！」

裂「よし！ようやく全工程が終了したわね！」

下「…最後だいぶ雑だったッスけどね…」

裂「いいのよ！読者はとっくに飽きてるんだから！」

下「それ言っちゃダメッスよ！」

裂「いいから！　じゃ、ぼちぼち締めるわよ！」

下「…了解ッス」

裂「…　では、以上で都市変説妖怪定例会議を終了します。長い時間お付き合いいただき、ありがとうございました。
　進行役は私、口裂け女と」

下「ベッドの下の男（新入り）でお送りしましたッス」

裂「それでは皆さん、またどこかでお会いしましょう。　さようなら…」

コ…　さ　～　て　、　じ　か　い　の　と　し　へ　ん　せ　つ

は　～　？　…

裂「何やってんのよアンタは！？」

メ「私メリーさん」

裂「アンタまで勝手に喋ってんじゃないわよ！」

メ「この前、話題のツ○ッターを始めてみたの。

すごく楽しくって便利だから、今度からターゲットに近づく時はツ○ッターを使おうと思ってるの。

でも…　もしターゲットがツ〇ッターをやってなかった時は…
…どうすればいいの…？」
裂「知らないわよ！従来通りの方法でやりゃいいでしょ！」

メ「次回のお話は…
　メリーさん　ブログ開設」
裂「アンタの日常なんか誰も興味無いわよ！」
メ「口裂け女　素人ＡＶ出演」
裂「するか！ブッ殺すわよ！？」
メ「コックリさんに逮捕状」
裂「やけにリアルだな！」
メ「追いかけババア　追いかけるのをやめる」
裂「そうなったらただのババアじゃないの！」
メ「人面犬　精〇と時の〇屋へ」
裂「何本格的に修行してんの！？」
メ「ＳＨＯＰ赤マント　全国展開」

裂「リスク高すぎるでしょ！」

メ「ミカちゃんの殺人未遂」

裂「ミカちゃん！やりすぎちゃダメだってば！」

メ「ベッドの下の男　銀幕デビュー」

裂「できるか！大人しくベッドの下にいなさい！」

メ「廃車」

裂「どんなタイトルよ！？」

メ「トイレの花子さん　ｉｎ　トウ〇ョウガー〇ズコレ〇ション」

裂「だいぶ大人の階段上ったわね！？」

メ「の、１０本なの」

裂「多すぎるでしょ！見てらんないわよ！」

コ…　じかいもまた、よんでくださいね～。

じゃん、けん、ぽん！ウフフフフフ…

裂「いつまでやってんの！
せっかくだから全員一緒に！　せーのっ！」
全員「もういいよ！！！！！！！！！！！！！」

番外編　都市変説妖怪定例会議（後書き）

はい、十説突破記念番外編の「都市変説妖怪定例会議」でした。
いやぁ～　…　長いっ！（笑）　こんな長い話を読ませてしまって申し訳ないです。

この話のアイデア自体は連載開始時から考えてました。連載が１０回を突破したら、それまで登場した妖怪達を全員集合させた話を書こう、と。まあ、いわゆるオールスターですね。
久しぶりに登場させたヤツもいるんで、懐かしいやらうっとうしいやら（笑）複雑な気分でした。　ですが、書くぶんにはとても楽しかったです。好き勝手やれたんで。
しかし今思うと…　口裂け女をツッコミ役にしといて良かったなあ、と思いますね（笑）彼女がいなかったらどうなってたことか…。ホント、お疲れ様でした。

今回の話の中のセリフには、本編でのセリフを流用したものが多数散りばめられております。興味があったら探してみてくださいませ。
では、今回もお付き合いいただき、ありがとうございました。皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

ちなみに次回予告の内容は、当然ながら全部ウソですんで（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1236i/

都市変説　～笑う笑わないはあなた次第～

2010年10月13日12時20分発行